昭和63年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第 2 分 冊 —

1989・3

三 重 県 教 育 委 員 会

例　言

1．本書は、昭和63年度農業基盤整備事業地域内に係る埋蔵文化財発掘調査の内、上相田遺跡、鳥土遺跡、榎長遺跡、伊勢寺遺跡北浦地区、明星地区内遺跡群の調査結果をまとめたものである。
2．調査に係る費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は農林水産部が負担した。
3．調査体制は下記によった。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査担当　三重県教育委員会文化課、松阪市教育委員会
　調査協力　三重県農林水産部農村整備課、松阪農林事務所
　　堀坂川沿岸土地改良区、明星土地改良区、松阪市教育委員会、明和町教育委員会
　　県文化財調査員ほか
4．調査面積、期間、担当者は下表のとおりである。

遺跡名		面積（㎡）	調査期間	担当者
上相田遺跡		1,000	昭和63年11月2日 ～　12月6日	三重県教育委員会文化課 主　事　河瀬　信幸 併任主事　小林　秀
鳥戸遺跡		1,200	昭和63年11月25日 ～　12月14日	三重県教育委員会文化課 主　事　河瀬　信幸 併任主事　江尻　健
榎長遺跡		280	昭和63年12月9日 ～　12月14日	三重県教育委員会文化課 主　事　河瀬　信幸 併任主事　小高　昌久
伊勢寺遺跡 北浦地区	A地区 B地区	2,300	昭和62年12月7日 ～　12月22日	松阪市教育委員会 文化財主事　榎本義譲 〃　前川嘉宏
	F地区	780	昭和63年6月7日 ～　6月29日	三重県教育委員会文化課 主　事　河瀬　信幸 併任主事　江尻　健
	G地区	1,035	昭和63年5月9日 ～　6月7日	三重県教育委員会文化課 主　事　森川　常厚 併任主事　小高　昌久 〃　江尻　健
明星地区内遺跡群		520	昭和63年6月13日 ～　7月28日	三重県教育委員会文化課 主　事　森川　常厚 〃　伊藤　裕偉

5．本書の図面作成及び執筆は主に各調査担当者が行い、目次及び文末にその名を記した。
6．図面における方位は、全て真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏6°20′（昭和62年）である。
7．本書に用いた事業計画図面は、農林水産部の提供による。
8．本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
9．本書で用いた遺構略記号は下記による。
　SB：掘立柱建物　SD：溝　SF：焼土　SH：竪穴住居　SK：土坑

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　次

Ⅰ．松阪市伊勢寺町　上相田遺跡 ……（小林　秀）　1
　1．歴史的環境 …… 1
　2．遺　構 …… 4
　3．遺　物 …… 4
　4．小　結 …… 6

Ⅱ．松阪市伊勢寺町　鳥戸遺跡 ……（江尻　健）　9
　1．遺　構 …… 9
　2．遺　物 …… 11
　3．小　結 …… 11

Ⅲ．松阪市伊勢寺町　榎長遺跡 ……（江尻　健）　19
　1．前　言 …… 20
　2．遺　構 …… 20
　3．遺　物 …… 21
　4．小　結 …… 21

Ⅳ．松阪市伊勢寺町　伊勢寺遺跡（北浦地区） ……23
　1．前　言 ……（森川常厚）　23
　2．地理的環境 ……（　〃　）　26
　3．Ａ地区 ……（　〃　）　26
　4．Ｂ地区 ……（　〃　）　29
　5．Ｆ地区 ……（江尻　健）　29
　6．Ｇ地区 ……（森川常厚）　32
　7．結　語 ……（　〃　）　40

Ⅴ．多気郡明和町　明星地区内遺跡群 ……（伊藤裕偉）　51
　1．はじめに …… 51
　2．調査区の位置と周辺の環境 …… 51
　3．調査の成果－層位と遺構－ …… 51
　4．調査の成果－出土遺物－ …… 56
　5．調査のまとめと検討 …… 58

挿　図　目　次

Ⅰ．上相田遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡地形図 …… 2
第３図　調査区位置図 …… 2
第４図　西側調査区遺構平面図 …… 3
第５図　東側調査区遺構平面図 …… 4
第６図　遺物実測図 …… 5

Ⅱ．鳥戸遺跡

第７図　遺跡地形図 …… 9
第８図　調査区位置図 …… 10
第９図　遺構平面図 …… 12
第10図　遺構平面図 …… 13
第11図　ＳＢ１・２・４・５・14実測図 …… 14
第12図　ＳＢ15～19実測図 …… 15
第13図　遺物実測図 …… 16

Ⅲ．榎長遺跡

第14図　遺跡地形図 …… 19
第15図　調査区位置図 …… 20
第16図　遺構平面図 …… 20
第17図　遺物実測図 …… 21

Ⅳ．伊勢寺遺跡（北浦地区）

第18図　遺跡地形図 …… 23
第19図　調査区位置図 …… 24
第20図　Ａ地区遺構平面図 …… 25
第21図　Ａ地区土層図 …… 26
第22図　ＳＨ２～４、ＳＢ１・５・６実測図 …… 27
第23図　Ａ地区出土遺物実測図 …… 28
第24図　Ｆ地区遺構平面図 …… 30
第25図　ＳＨ18・19、ＳＢ12・14・15・17実測図 …… 31
第26図　Ｆ地区出土遺物実測図 …… 32
第27図　Ｇ地区遺構平面図 …… 34
第28図　Ｇ地区遺構平面図 …… 35
第29図　Ｇ地区土層図 …… 36
第30図　ＳＨ24・25・27・29、ＳＢ26・28・30・31、ＳＡ33実測図 …… 37
第31図　ＳＫ21・22実測図 …… 38
第32図　Ｇ地区出土遺物実測図 …… 39
第33図　Ｇ地区出土遺物実測図 …… 40

Ⅴ．明星地区内遺跡群

第34図　遺跡位置図 …… 51
第35図　調査区位置図 …… 52
第36図　調査区土層断面図 …… 53
第37図　調査区平面図 …… 54
第38図　調査区地区割り図 …… 55
第39図　Ⅱ区ＳＤ１土器出土状況図 …… 55
第40図　Ⅲ区南の隆起地形 …… 56
第41図　Ⅲ区ＳＢ１およびＳＫ１平面・土層断面図 …… 57
第42図　Ⅲ区土坑ＳＫ３平面・土層断面図 …… 57
第43図　土坑ＳＫ３、掘立柱建物ＳＢ１他出土土器 …… 58
第44図　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区各遺構他出土土器 …… 59

表　目　次

Ⅰ．上相田遺跡
表1　遺物観察表 …… 6

Ⅱ．鳥戸遺跡
表2　遺物観察表 …… 16

Ⅲ．榎長遺跡
表3　遺物観察表 …… 22

Ⅳ．伊勢寺遺跡（北浦地区）
表4　遺物観察表（1） …… 41
表5　遺物観察表（2） …… 42
表6　遺物観察表（3） …… 43
表7　遺物観察表（4） …… 44

Ⅴ．明星地区内遺跡群
表8　遺物観察表（1） …… 60
表9　遺物観察表（2） …… 61

写　真　目　次

面調査部分（南から） …… 7
ＳＨ１（北西から） …… 7
出土遺物 …… 8

Ⅱ．鳥戸遺跡
ＳＢ１（西から） …… 17
ＳＢ15（西から） …… 17
ＳＢ17～19（西から） …… 18
調査区全景（西から） …… 18
出土遺物 …… 18

Ⅲ．榎長遺跡
調査区全景（南から） …… 22

Ⅳ．伊勢寺遺跡（北浦地区）
Ａ地区全景（西から） …… 45
ＳＢ１（北から） …… 45
ＳＨ２（東から） …… 46
ＳＢ６（南から） …… 46
Ｆ地区全景（西から） …… 47
紡錘車出土状況（北から） …… 47
ＳＢ12（西から） …… 48
ＳＢ14（西から） …… 48
Ｇ地区全景（北から） …… 49
ＳＨ24・25・27・29（北から） …… 49
出土遺物 …… 50

Ⅴ．明星地区内遺跡群
調査前風景（Ⅲ区） …… 63
調査風景（Ⅲ区） …… 63
北側全景（南から） …… 64
ＳＤ４および東壁土層断面（西から） …… 64
全景（南から） …… 65
溝ＳＤ１遺物出土状況および
土層断面（西から） …… 65
全景（北から） …… 66
ＳＢ１付近（西から） …… 66
土器出土状況（東から） …… 67
完掘状況（東から） …… 67
ＳＫ３出土土器（第43図） …… 68
土器溜り出土土器（第44図） …… 68
ＳＢ１出土土器（第43図） …… 69
土製支脚・土錘他土師器類（第44図） …… 69
須恵器・陶器類（第44図） …… 70
Ⅰ・Ⅱ区出土土器（第44図） …… 70

Ⅰ．松阪市伊勢寺町　上相田遺跡

1．歴史的環境

上相田遺跡は、櫛坂川によって形成された扇状地の、ほぼ中央部分に位置している。そして、周囲には既に多くの遺跡の存在が確認されている。中でも広大な面積を占める伊勢寺遺跡が一際目を引くが、一見して遺跡が櫛坂川水系に集中していることに気付く。

平安時代に成立した『倭名類聚抄』[①]には、周辺の郷として一志郡「民太」、水系を異にしているが飯高郡「美太」の名が見えている。そして、それぞれ現在の松阪市美濃田、及び阿形に比定されている。しかし、遺跡の集中している現在の伊勢寺町には、対比され得る古代郷名は確認されていない。ただ、遺跡の密度や伊勢寺廃寺の存在からすれば、この地域が古代よりかなり繁栄していたことは確実である。

さて、伊勢国の古代から中世の歴史的様相を理解する上で、最も重要なのが伊勢神宮の存在である。当遺跡の位置する旧一志郡や隣接する飯高郡は「神郡」にこそ含まれてはいなかったが、中世においては幾つかの御薗・御厨を確認することができる。中世の中頃の伊勢神宮領の実情を伝える『神鳳鈔』[②]には、当該地域の神宮領として、飯高郡深長御厨・英太御厨・岩内御厨、一志郡の大阿射賀・小阿射賀御厨が載せられている。

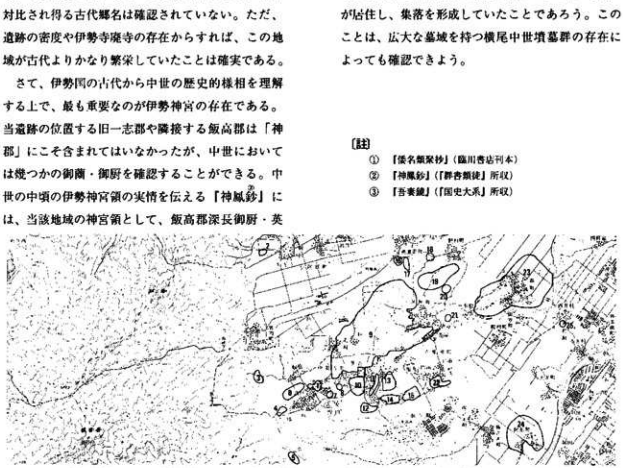
『吾妻鏡』[③]所収の文治3年（1187）6月20日付けの関東下文によれば、伊勢国の神宮領に補任されていた地頭が「致自由之濫行」し、所々を押領して神人を煩わせるなどの悪行をしていたことが記されている。この様な状況は伊勢寺周辺でも同様であったようで、同じく『吾妻鏡』所収の「内宮役夫人工作料未済成敗所々事」の中に、「但於阿射賀者補地頭所也」とあることからもわかるのである。即ち当該地域には、恐らく神宮領の経営に係わっての様々な人々が居住し、集落を形成していたことであろう。このことは、広大な墓域を持つ横尾中世墳墓群の存在によっても確認できよう。

[註]

① 『倭名類聚抄』（臨川書店刊本）

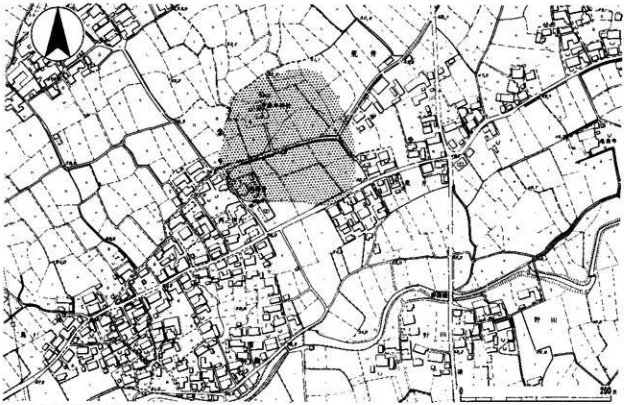
② 『神鳳鈔』（『群書類従』所収）

③ 『吾妻鏡』（『国史大系』所収）

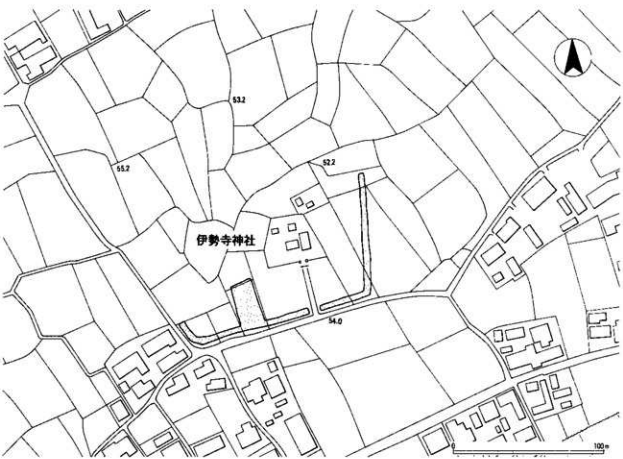


1．上相田遺跡　2．新田遺跡　3．蛇原広遺跡　4．榎長遺跡　5．横尾墳墓群　6．鳥戸遺跡
7．辻之前遺跡　8．辻墓垣内遺跡　9．伊勢寺遺跡　10．大垣内遺跡　11．王子遺跡　12．向王子B遺跡
13．大坪遺跡　14．向王寺A遺跡　15．中広遺跡　16．美濃田出口遺跡　17．別当垣外遺跡　18．赤城遺跡
19．前沖遺跡　20．北小倉遺跡　21．不堂遺跡　22．門前遺跡　23．曲遺跡　24．阿形遺跡
25．山の神遺跡

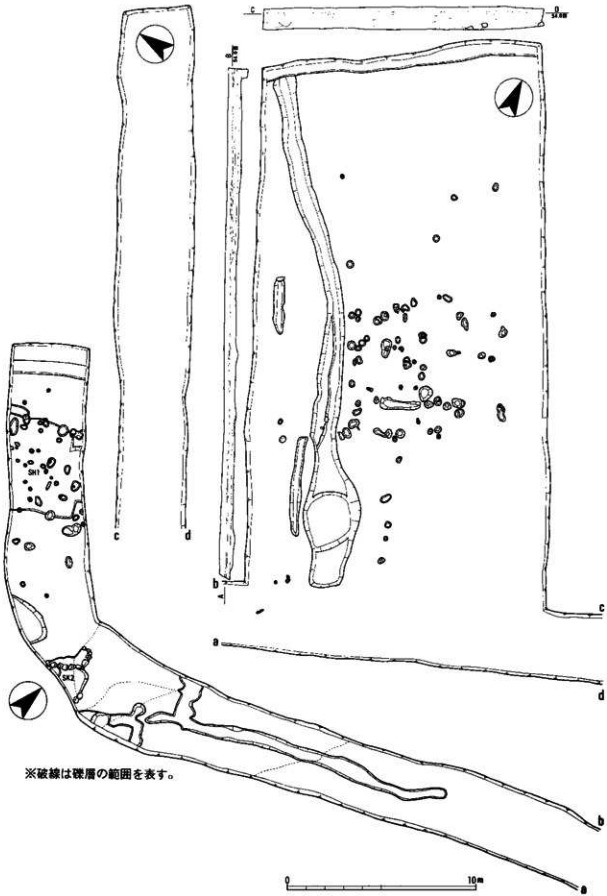
第1図　遺跡位置図　（1：50,000）　（国土地理院・大河内・松阪・1：25,000）



第２図　遺跡地形図　（１：5,000）



第３図　調査区位置図　（１：2,000）



第４図　西側調査区遺構平面図　（１：200）

2. 遺　構

400㎡程の面調査と、伊勢寺神社を取り囲む形でのトレンチ調査を実施した。神社の参道を挟んで西側の地区では比較的良好な遺物包含層が確認され、奈良時代から平安時代の遺物がかなり混入していたが、遺構としてのまとまりに欠けていた。また東側では、耕作土直下において黄赤褐色粘質土の安定した地山に達した。

まずＳＨ１とした遺構であるが、不定形であること、及び焼土が３ヶ所で認められたことより、複数棟の竪穴住居が複雑に切り合っているものと判断される。したがって、個々の住居の規模や年代を確定するには到らなかったが、大きくは、出土遺物から奈良時代頃と考えられる。

ＳＫ２は、部分的に石で囲った土坑である。用途については不明である。出土遺物より、近世の遺構と判断される。

次に面調査部分であるが、遺構検出面が人頭大の石を多く含んだ荒砂層であったため、厳密な検出が出来ない状況であった。調査区中央の小穴集中部分には恐らく掘立柱建物があったと見られるが、平面形や規模は特定できなかった。南北に走る溝はこの建物の区画とも考えられるが、遺物がなく、関連性は確定できない。

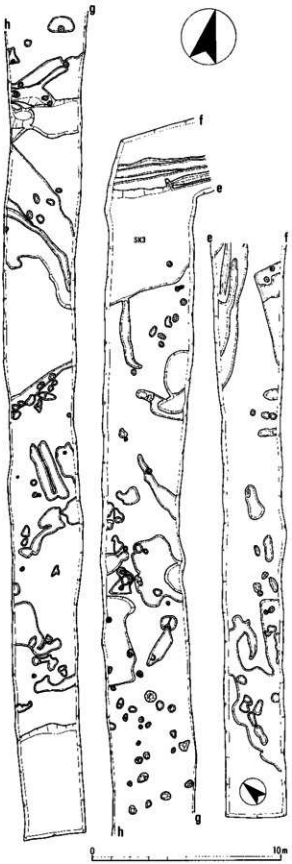
東側の地区は多くの小穴や土坑を検出したが、出土遺物がほとんど無く、ＳＫ３を除いて見るべき遺構はない。

ＳＫ３は、あるいは溝とも考えられるが、一応土坑と判断した。用途は不明ながらも、16世紀の初頭頃に比定し得る南伊勢系の土師器塊が相当量出土している。

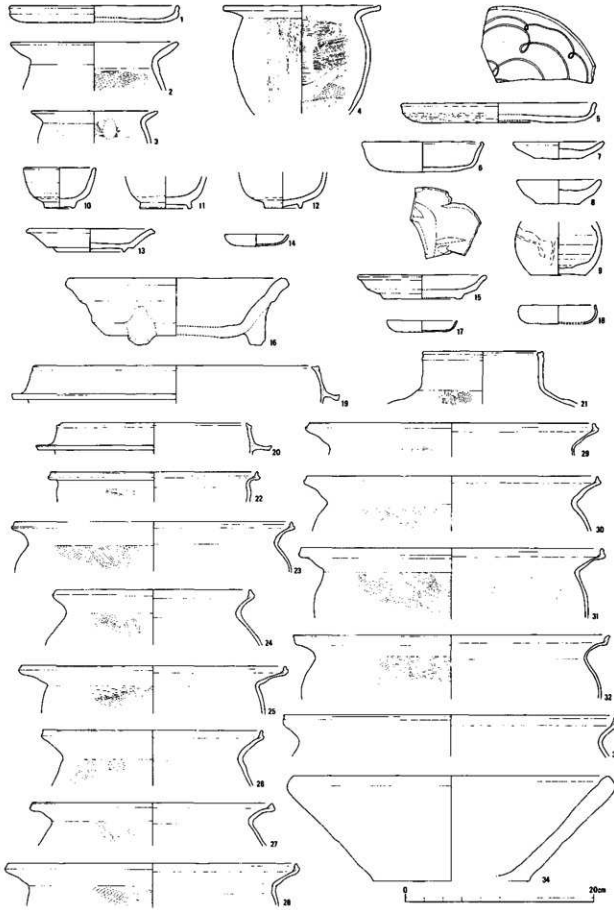
3. 遺　物

土師器甕（２～４）はＳＨ１からの出土である。口縁部を強く「く」字形に屈曲させ、大きく開くものである。胴部外面には縦方向のハケメが、内面には横方向のハケメが施されている。

平安時代の遺物はほとんどなかったが、ロクロ土師器皿（７・８）は包含層の出土ながら完形であった。



第５図　東側調査区遺構平面図　（１：200）



第6図　遺物実測図　（1：4）

ＳＫ３出土の鍋は、口径より25cm前後のものと33cm前後の２種類があった。器壁は非常に薄く、胎土も緻密で焼成も良好である。口縁端部を折り返し、内外を強くナデて、断面は三角形状を呈す。時期的には16世紀初頭頃の特徴を持っている。ただ、31～33は口縁端部の形状を異にしており、若干先行する時期のものと考えられる。

4. 小　結

今回の調査はトレンチ調査が中心であったので、本遺跡の性格を把握するに足る充分な成果が得られなかった。しかし周囲に奈良時代から中世にかけての、良好な遺跡のある可能性は確認できたものと思う。今後の調査の進展に期待したい。

（小林　秀）

番号	遺構	器種	器形	法量(cm)	成形・調整の特徴	色調	胎土	焼成	残存度	備考	登録番号
1	ＳＨ１	土師器	皿	口：18.0 高：1.8	口縁内外面ヨコナデ	淡褐色	密	良	口縁 1／8		53-36
2	＊	＊	皿	口：17.8	口縁内外面ヨコナデ 体部内外面ハケメ	橙褐色	やや粗	軟	口縁Ｐ 1／8		X53-12
3	＊	＊	＊	Ｌ：13.4	＊	暗赤褐色	密	やや軟	口縁 1／4		51-7
4	＊	＊	＊	口：16.4	口縁内外面ヨコナデ 体部内外面ケズリ 底部内面ケズリ	褐褐色	やや粗	良	口縁 1／4	外面煤付着	60-34
5	包含層	＊	皿	Ｈ：20.6 高：2.0	口縁内外面ヨコナデ 底部外面ケズリ	明赤褐色	粗	＊	30%	内面に墨文	50-2
6	＊	＊	杯	口：13.8 高：3.2	口縁内外面ヨコナデ	乳褐色	＊	軟	90%		50-1
7	＊	＊	皿	口：9.6 高：1.8	ロクロナデ 底部糸切	黄灰褐色	＊	＊	55%		50-5
8	＊	＊	＊	口：8.8 高：2.5	＊	淡黒褐色	＊	＊	完形		50-4
9	＊	陶器	壺		＊	白灰色	密	良	底部 1／2	外面に灰釉	54-17
10	ＳＫ２	＊	鍋	Ｈ：7.4 高：4.3	ロクロナデ 高台ケズリダシ	濃灰色	＊	＊	口縁 1／7	内外面に施釉	62-42
11	＊	＊	＊		＊	白褐色	＊	＊	底部 1／2	鉄釉	53-14
12	＊	＊	＊		＊	＊	＊	＊	底部 80%	＊	53-15
13	包含層	＊	皿	口：13.6 高：2.4	＊	明灰色	＊	＊	50%	全面施釉	50-3
14	ＳＫ２	土師器	＊	Ｈ：6.8 高：1.2	ユビオサエ・ナデ	褐色	＊	＊	70%		60-33
15	＊	陶器	＊	口：13.8 高：2.6	ロクロナデ 高台ケズリダシ	明乳灰色	＊	＊	20%	全面施釉	61-40
16	包含層	＊	鉢	口：23.6 高：7.0	口縁内外面ヨコナデ 鍔ハリツケ	暗赤褐色	＊	＊	口縁 1／8	煤付着	54-16
17	ＳＫ３	土師器	皿	口：6.4 高：1.2	ユビオサエ・ナデ	明乳褐色	＊	＊	口縁 1／4	歪み大きい	52-37
18	＊	＊	＊	口：8.8 高：2.0	ユビオサエ・ナデ	暗褐色	＊	＊	口縁 1／4		60-32
19	＊	＊	羽釜	Ｈ：30.0	口縁内外面ヨコナデ 鍔ハリツケ	乳褐色	＊	＊	口縁 1／16	外面煤付着	55-19
20	＊	＊	＊	口：19.4	口縁内外面ヨコナデ 鍔ハリツケ	黄褐色	＊	＊	口縁 1／10	＊	55-20
21	＊	＊	茶釜	Ｈ：12.8	口縁内外面ヨコナデ 体部外面ハケメ	橙褐色	＊	＊	口縁 1／2		51-10
22	＊	＊	鍋	Ｈ：22.0	＊	暗褐色	＊	＊	口縁 1／7	外面煤付着	58-27
23	＊	＊	＊	Ｈ：29.2	＊	暗赤褐色	＊	＊	口縁 1／9	＊	55-18
24	＊	＊	＊	Ｈ：20.4	＊	暗褐色	＊	＊	口縁 1／12	＊	57-23
25	＊	＊	＊	口：27.8	＊	＊	＊	＊	口縁 1／12	＊	58-39
26	＊	＊	＊	口：23.2	＊	＊	＊	＊	口縁 1／16	＊	59-29
27	＊	＊	＊	口：25.4	＊	＊	＊	＊	口縁 1／10	＊	59-28
28	＊	＊	＊	Ｈ：30.2	＊	＊	＊	＊	口縁 1／10	＊	57-21
29	＊	＊	＊	口：30.2	＊	＊	＊	＊	口縁 1／15	＊	59-30
30	＊	＊	＊	口：30.8	＊	淡褐色	＊	＊	口縁 1／15	＊	58-26
31	ＳＫ３	土師器	鍋	口：31.8	＊	淡橙色	密	良	口縁 1／10	外面煤付着	55-9
32	＊	＊	＊	口：33.6	＊	淡褐色	＊	＊	口縁 1／5	＊	51-8
33	＊	＊	＊	口：35.4	＊	＊	＊	＊	口縁 1／15	＊	60-31
34	ＳＫ２	陶器	鉢	口：34.8 高：11.0	ロクロナデ	暗赤褐色	粗	軟	口縁 1／12	使用痕跡あり	53-13

表１　遺物観察表

面調査部分（南から）

ＳＨ１（北西から）

6

13

7

8

14

31

32

出土遺物　（1：3）

Ⅱ．松阪市伊勢寺町 鳥戸（とりど）遺跡

当遺跡は、松阪市伊勢寺地区の大部分を占める堀坂川の扇状地の上位部に所在し、現況は水田がほとんどで、僅かに畑地が混在している。調査区は水路造成部分にあたるため、幅約３ｍ、長さ約280ｍにわたる非常に細長い区画を設定せざるを得なかった。

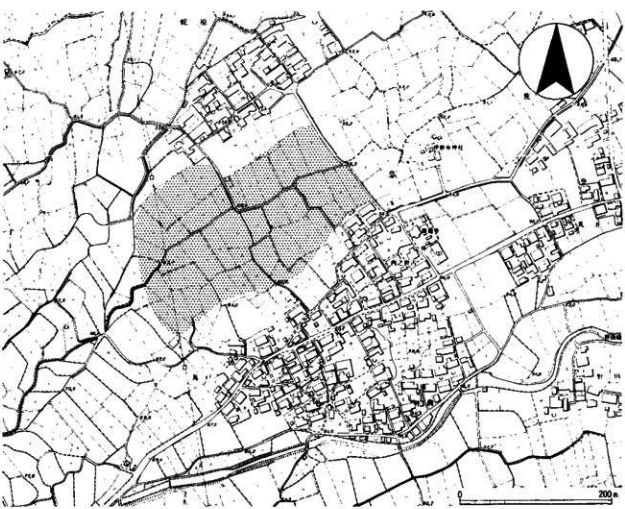
層序は、基本的に表面から耕作土・床土・暗褐色砂質土（中世遺物包含層）・褐色砂質土（奈良～平安時代遺物包含層）・黄褐色砂質土（地山）である。遺構の検出は黄褐色砂質土上面で行った。

1．遺　構

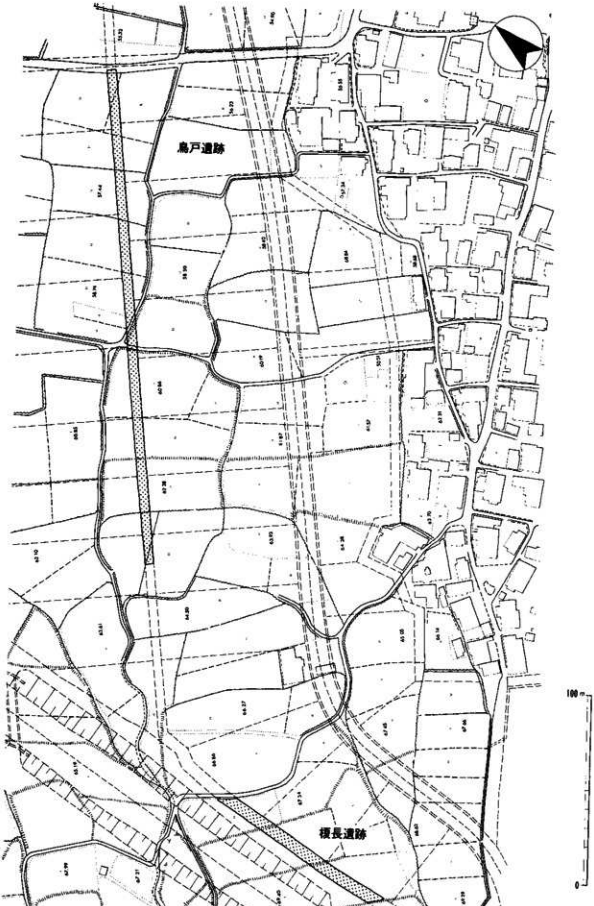
調査の結果、掘立柱建物10棟と土坑６基、そして多くの小穴や溝を検出した。出土遺物量は、東のより低位部で多い傾向にあった。中央部から西側では多くの小穴を検出したものの、遺構としてのまとまりは確認できなかった。また、土坑ＳＫ３・７・９・12・13とＳＤ11からは土師器片が出土したが、顕著な遺構ではなかった。以下、主な遺構について述べることとする。

（１）掘立柱建物

ＳＢ１　検出できなかった柱穴も多いが桁行３間、梁行３間の南北棟である。棟方向はＮ４°Ｅ、柱間は桁行約1.1ｍ、梁行約0.8ｍで桁行でやや広くなって



第７図　遺跡地形図　（１：5,000）



第8図　調査区位置図　（1：2,000）

いる。出土遺物は細片であるため、時期は特定できない。

ＳＢ２　全体の規模は不明であるが、桁行３間、梁行２間以上の東西棟と考えられる。棟方向はＥ32°Ｎ、柱間はやや広いものもあるが桁行、梁行とも約1.5ｍの等間である。出土遺物は細片であるため、時期は特定できない。

ＳＢ４　調査区内の中央で検出された。建物の東側は調査区外にあるため規模を確定できないが、仮に南北棟とすれば、桁行３間を確認したことになる。その場合棟方向はＮ24°Ｅ、柱間は不等間である。出土遺物から、奈良時代前半期頃と考えられる。

ＳＢ５　北側は調査区外であるが、桁行３間以上、梁行２間の南北棟と推定した。その場合棟方向はＮ３°Ｗ、柱間は桁行1.5ｍ、梁行1.6ｍの等間である。出土遺物がなく、年代を決定できなかった。

ＳＢ14　全体の規模は不明であるが、仮に東西棟とした場合の棟方向はＮ11°Ｅ、桁行４間、梁行２間以上を確認したことになり、柱間は不等間である。柱掘形は直径約60㎝で、比較的大きかった。ＳＫ13と重複しているが、関連性については分からない。年代は、平安時代前期頃と考えられる。

ＳＢ15　南北棟とすれば棟方向Ｎ28°Ｗ、桁行２間以上、梁行２間を確認した。柱間は桁行1.65ｍ、梁行1.5ｍの等間で、柱掘形は一辺約60㎝であった。年代は不明である。

ＳＢ16　東西棟とすれば、棟方向Ｅ29°Ｗ、桁行３間を確認した。柱間は約2.0ｍで、柱掘形は直径約60㎝で柱痕跡を残すものもあった。年代は不明である。

ＳＢ17　仮に南北棟とした場合、梁行２間を確認したことになる。棟方向はＮ27°Ｗ、柱間は1.85ｍの等間である。柱掘形は、一辺約80㎝の方形を呈する大形のものである。

ＳＢ18　仮に南北棟とした場合、桁行１間以上、梁行２間の総柱の建物である。柱掘形は一辺60㎝の方形を呈し、棟方向はＮ28°Ｗ、柱間は桁行1.8ｍ、梁行2.7ｍ＋2.25ｍである。

ＳＢ19　仮に南北棟とした場合、梁行２間分を検出したことになる。棟方向はＮ26°Ｗ、柱間は1.5ｍ＋1.8ｍで、掘形は一辺70㎝を呈する大形のものである。

（２）土坑

ＳＫ10　北半分が調査区外に出ているが、直径約３ｍ、深さ20㎝の、ほぼ円形の土坑と考えられる。出土遺物から、平安時代後期頃と考えられる。

２．遺　物

出土遺物は、整理箱に換算して10箱程であった。土坑等から一括して出土したものはなく、包含層からの出土のものが多い。しかも（１）が完形であるほかは、小片のものがほとんどである。時期的には平安時代が中心で、奈良時代の遺物も若干出土している。

（１）は、ＳＢ４出土の土師器の甕、（２～４）は、ＳＢ14出土の土師器の杯、ＳＢ18からは、土師器杯（５）や高杯（６）が出土している。土師器杯（７～９）や製塩土器（10）はＳＢ17出土、土師器杯（11、12）はＳＢ19出土で、須恵器蓋（13）や土師器杯（14）、高杯（15）、灰釉陶器（16、17）は包含層の出土である。

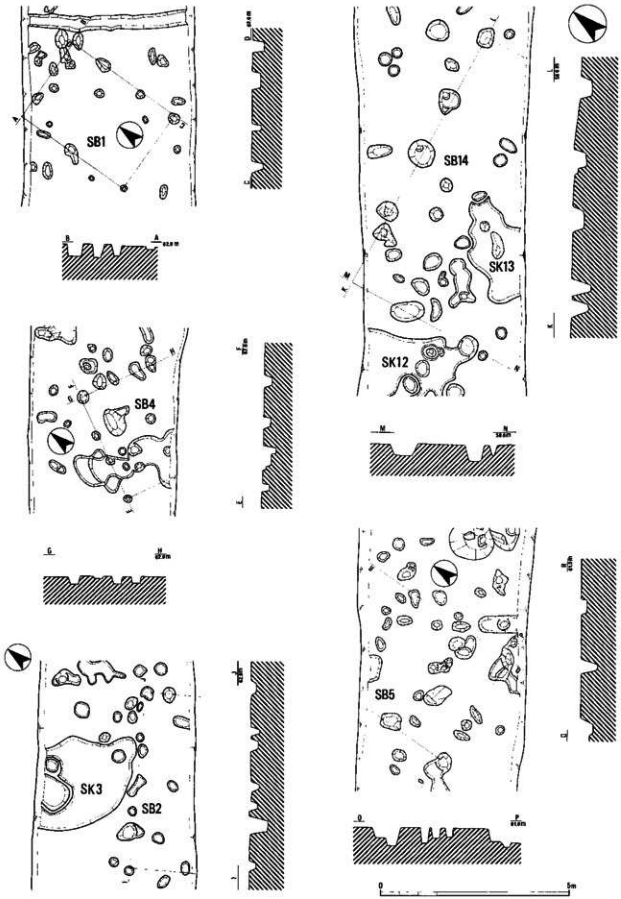
３．小　結

今回発掘調査を行った部分は当遺跡のほぼ中央部分にあたり、遺物の散布量も多い地域である。しかし、調査区が水路予定地の幅６ｍに限定されたものであるため、住居跡の存在を確認するにとどまり、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。

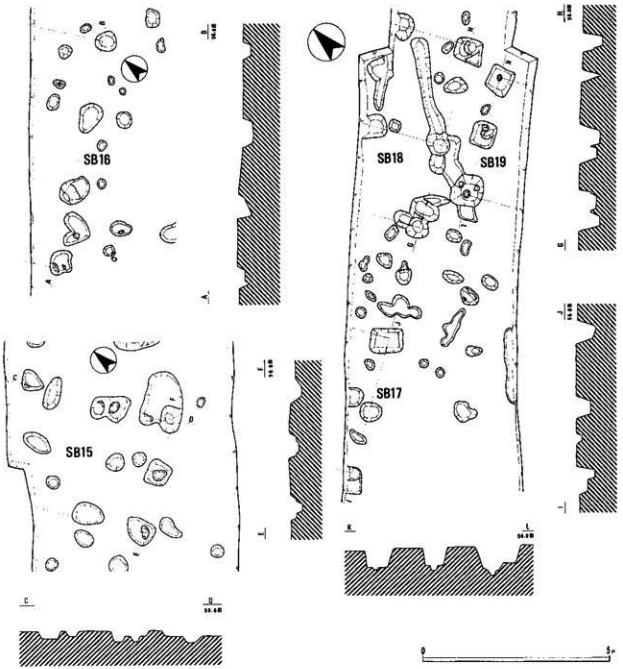
遺構は、時期が不明確なものが多いが、包含層出土遺物等も参考にすれば、調査区西部のもが奈良時代、東部のものは平安時代前半に相当するものと推測される。その場合、奈良時代の掘立柱建物ＳＢ１・２・４・５は、柱掘形が小さく小規模なもので、棟

第9図　遺構平面図　（1：200）

第10図　遺構平面図　（1：200）



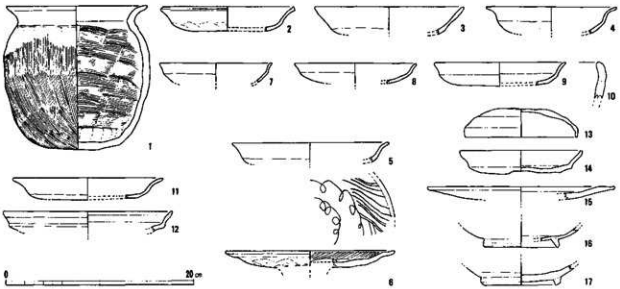
第11図　ＳＢ１・２・４・５・14実測図　（１：100）



第12図　ＳＢ15～19実測図　（１：100）

方向も様々である。それに対して平安時代前期と推測されるＳＢ15～19は、比較的大形の方形の柱掘形をもち、棟方向も揃えており、規格的な配置をもつ建物群である。したがって、奈良時代と平安時代前半では遺跡の性格が大きく変わったことが推測されるが、遺構の時期決定に不確定の要素も多いことから、その可能性を指摘するにとどめる。

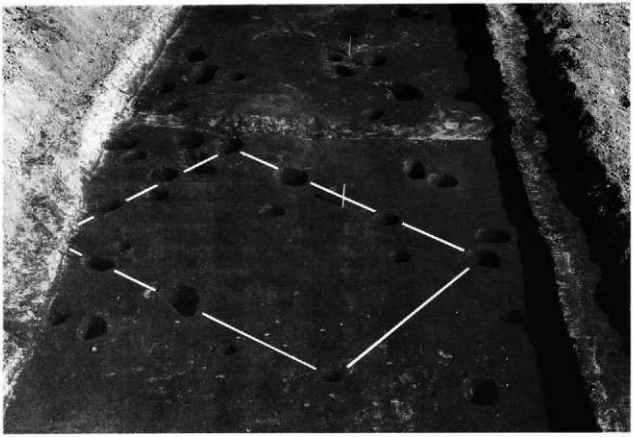
（江尻　健）



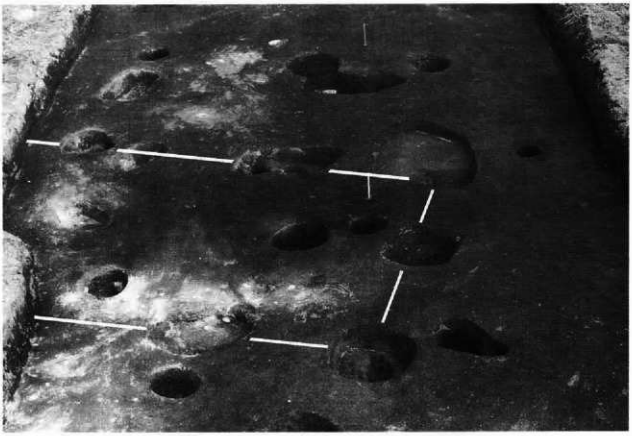
第13図　遺物実測図　（1：4）

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量（cm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	19	土師器・甕	SB4	15	15.3		体部外面ハケメ、内面細かいハケメ	やや粗	良	淡灰褐色	完形	
2	5	土師器・杯	SB14	14	2.7		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	良	良好	赤褐色	1／10	
3	6	〃	〃	16	3.2		〃	〃	〃	〃	〃	内部に炭化物付着
4	14	〃	〃	14	3.0		〃	〃	〃	明褐色	〃	
5	7	〃	SB18	17	2.5		〃	〃	〃	赤褐色	1／20	
6	3	土師器・高杯	〃	20	—		杯部内面放射暗文とラセン暗文、外面ヘラケズリ	〃	〃	〃	1／10	
7	13	土師器・杯	SB17	12	3.0		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	〃	やや軟	明灰褐色	1／10	
8	18	〃	〃	13	2.4		〃	〃	良	淡褐色	〃	
9	17	〃	〃	14	2.3		口縁部ヨコナデ、底部外面ナデ	〃	〃	〃	〃	
10	18	製塩土器	〃	—	—		内面ナデ、外面未調整	粗	軟	明褐色	小片	
11	9	土師器・杯	SB19	16	2.3		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	良	良	赤褐色	1／10	
12	10	〃	〃	18	3.0		口縁部2段にヨコナデ、底部外面未調整	〃	〃	〃	〃	
13	1	須恵器・壺	包含層	12	3.1		内外面ロクロナデ、天井部外面ヘラ切り未調整	良	良好	暗灰色	1／4	
14	2	土師器・杯	包含層	13	2.5		口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	やや粗	良好	〃	1／4	
15	8	土師器・高杯	〃	20	—		口縁部ヨコナデ、他は不明瞭	良	〃	赤褐色	1／10	
16	11	灰釉陶器・鉢	〃	—	—	高台径8	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	〃	明灰白色	1／5	
17	12	〃	〃	—	—	高台径9	〃	〃	〃	〃	〃	

表2　遺物観察表



ＳＢ１（西から）



ＳＢ15（西から）

ＳＢ17～19（西から）

調査区全景（西から）

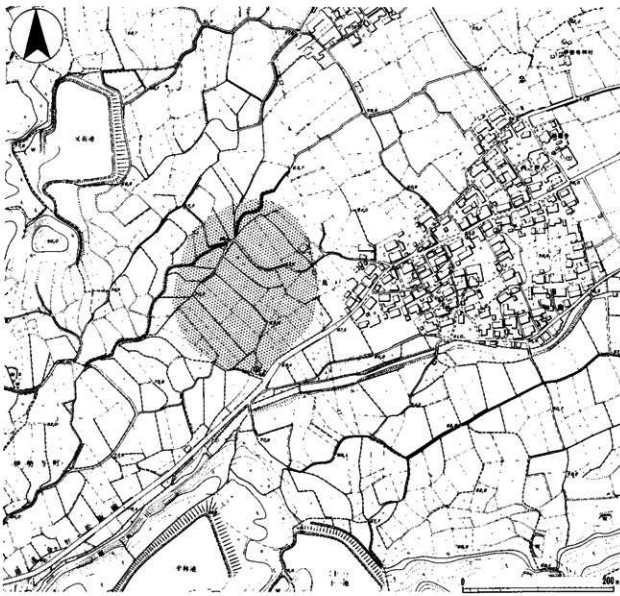
1

出土遺物　（１：３）

Ⅲ. 松阪市伊勢寺町 榎長遺跡（えんのきおさ）

1. 前　言

当遺跡は、伊勢寺地区の大部分を占める櫛坂川扇状地の扇頂部近くに位置し、現況は大部分が水田で若干の畑地が混在している。名称は異なるものの、隣接する鳥戸遺跡とほぼ同一の性格をもつ遺跡と考えられる。調査区は、排水路予定地の幅３ｍ、総延長76ｍに及び、これは扇状地の上位ややド方を横断するかたちとなる。基本層序は、耕作土（褐灰色砂質土）、床土（橙褐色砂質土）、灰色砂質土（中世遺物包含層）、褐色砂質土（奈良・平安時代遺物包含層）、黄褐色混礫土である。遺構検出は、黄褐色混礫土上面で行った。



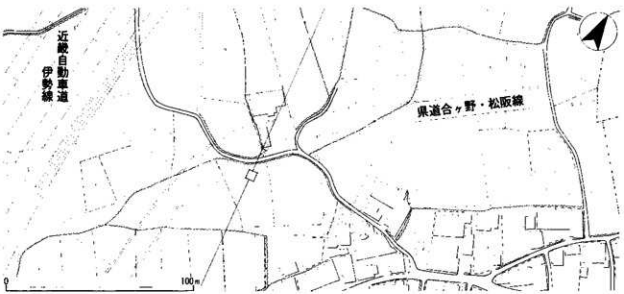
第14図　遺跡地形図　（１：5,000）

2. 遺　構

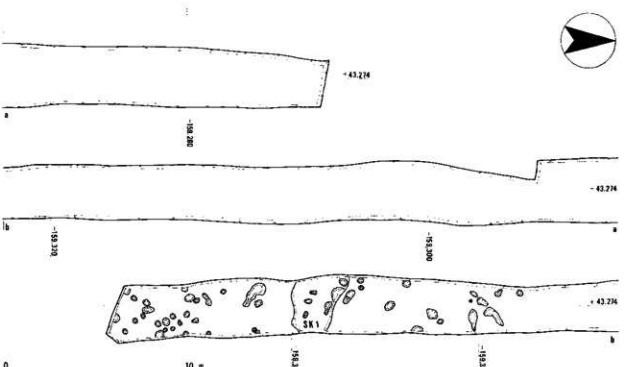
遺構は、調査区の西側に集中して検出されたが、調査区の幅が3ｍと狭いこともあって、建物に復元できるものはなかった。

ＳＫ１　調査区を東西に横断するかたちで検出された。不定形な楕円形を呈し、底部は平である。深さは検出面から20cmと浅い。埋土の遺物から、奈良時代前期頃と考えられる。

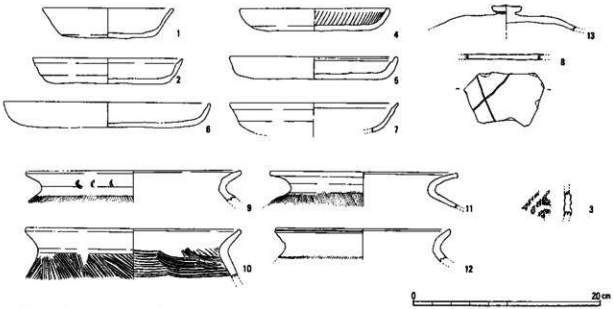
小穴群　調査区西部で検出された。昭和60年に当調査区の西側10ｍで、近畿自動車道に伴う発掘調査が行われた際に、多数の竪穴住居や掘立柱建物が検出されており[2]、それらとの関連が考えられる。



第15図　調査区位置図　（１：2,000）



第16図　遺構平面図　（１：200）



第17図　遺物実測図　（1：4）

3. 遺　物

整理箱5箱程度の出土があり、その大半は土器である。時期は奈良時代の土師器・須恵器が中心で、器種は皿・甕が多い。また小片であるが、縄文時代中期末～後期前半に比定されるものも出土した。

（1）ＳＫ１出土の遺物

（1）は須恵器の杯、（2）は土師器の皿である。（2）の口縁端部内面は、弱い凹面を呈する。

（2）包含層出土の遺物

縄文土器（3）　外面に縄文を施した後、沈線が刻まれる。中期末～後期前半に属するものと考えられる。

土師器　（7）は杯、（4）～（6）は皿、（9）～（12）は甕である。（8）は底部片であり、杯の可能性もあるが、一応皿としておく。

皿には、口縁端部内面に弱い沈線を施すもの（5）・（6）と、まるくおさめるもの（4）がある。底部外面の調整は、（5）が未調整の他は、ヘラケズリと考えられるが、（6）・（8）は明瞭でない。（8）の底部外面には、「×」のヘラ記号が刻まれる。

甕は、いずれも体部から「く」字に屈曲する口縁部をもつが、（9）・（11）は水平ちかくまで外反する。調整は、外面ハケメ、内面ナデであるが、（10）は内面にもハケメを施す。（9）の頸部外面には、ヨコナデが雑なため、工具痕が三日月状に残る。

須恵器（13）　偏平なつまみを貼り付ける蓋である。天井部外面の1／3をロクロケズリする。

4. 小　結

榎長遺跡は、昭和60年に近畿自動車道建設にともない、約2,500㎡がすでに調査され、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物等が検出されている[2]。今回の調査区は、その東側に約10ｍの間隔をおいて並行する幅3ｍのトレンチである。このため、検出できた遺構は、ＳＫ１と小穴群にとどまった。いずれも奈良時代に属するものと考えられ、前回の調査で検出したものと一連の遺構群と推測される。このため、ＳＫ１は竪穴住居、小穴群は掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

（江尻　健）

［註］

① 河北秀実　「榎長遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』　三重県教育委員会　1986. 3

② 前掲①に同じ

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
1	SK1	B－6 土坑1	須恵器	杯	口径 14 器高 3.2	平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	明灰色	密	1／3	やや不良	5
2	*	*	土師器	皿	口径 16 器高 2.7	底部から屈曲して立ち上がる1稜部で、端部内面に面をもつ。	底部外面ヘラケズリ（？）、口縁部ヨコナデ	赤褐色	*	1／18		6
3	—	B－3 甕	縄文土器	鉢	—		外面縄文を施した後沈線	明褐色	砂粒多含	小片		13
4	—	包	土師器	皿	口径 16 器高 2.4	平な底部から屈曲ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	内面放射暗文、底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色	密	1／16		4
5	—	包 淡褐色土	*	*	口径 18 器高 2.4	平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部内面に浅い沈線を施す。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	明黄褐色	*	1／10		7
6	—	*	*	*	口径 22 器高 2.7	*	底部外面ヘラケズリ（？）、口縁部ヨコナデ	明赤褐色	*	1／4		3
7	—	B－3 包	*	杯	口径 18 器高 3.2	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は外反する。	底部外面ナデ、口縁部ヨコナデ	赤褐色	*	*		10
8	—	包 淡褐色土	*	皿	—		底部外面ヘラケズリ（？）	黄橙色	*	小片	外面ヘラ記号「×」	9
9	—	B－3 包	*	甕	口径 22.6	「く」字に屈曲する口縁部で、端部はつまみ上げる。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	赤白色	*	1／10		12
10	—	*	*	*	口径 22.8	「く」字に屈曲する口縁部で、端部は内に肥厚する。	内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	*	1／8		11
11	—	B－4 P1	*	*	口径 20	「く」字に大きく外反する1稜部で端部は肥厚し外に面をもつ。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	明黄橙色	*	1／4		8
12	—	包 淡褐色土	*	*	口径 19	「く」字に屈曲する口縁部で、端部は外に面をもち、沈線を巡らす。	*	淡褐色	*	1／8		2
13	—	*	須恵器	壺	-	平な天井部に偏平なつまみをはり付ける。	天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	明灰色	*	3／4		1

表3　遺物観察表

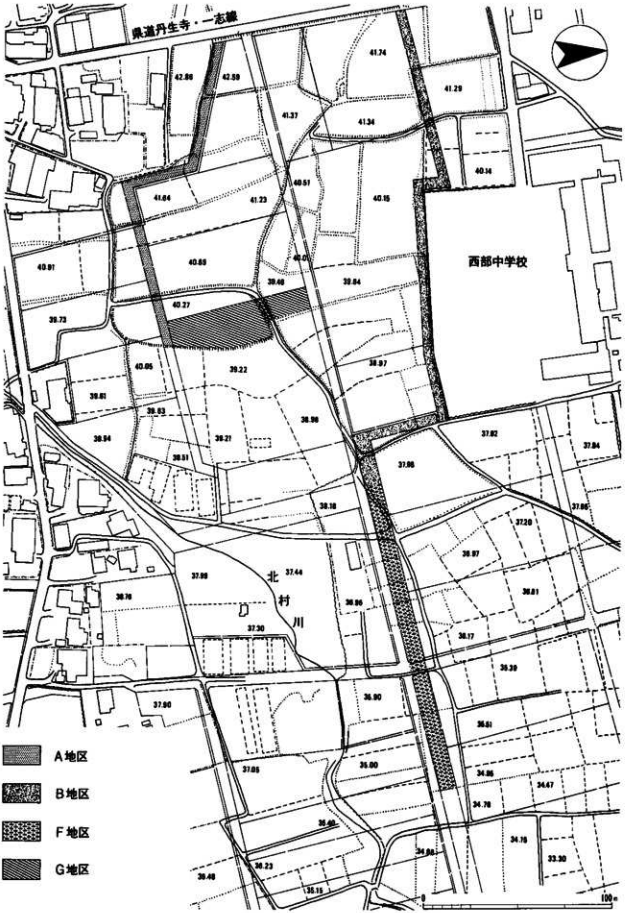
調査区全景（南から）

Ⅳ．松阪市伊勢寺町　伊勢寺遺跡（北浦地区）

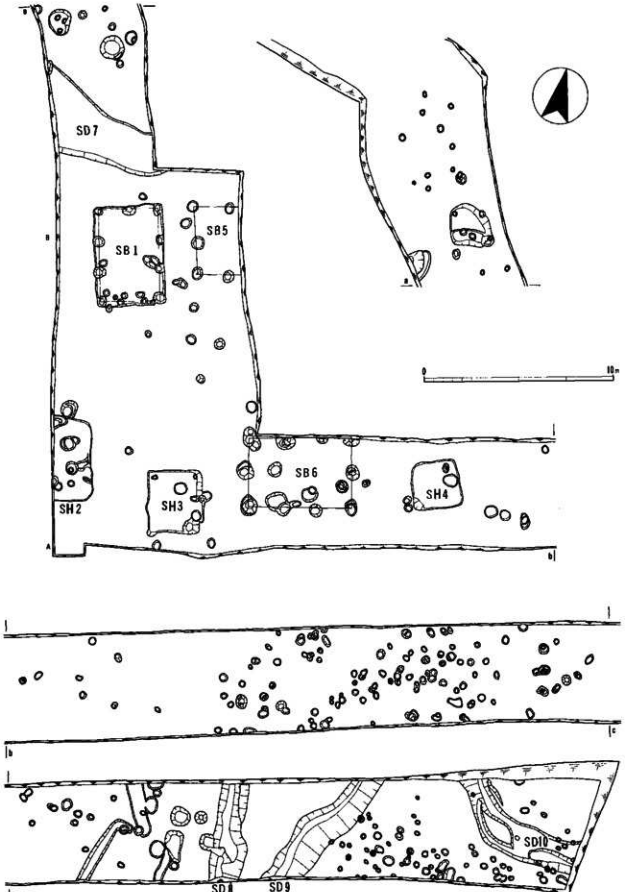
1．前　　言

昭和62年度の県営圃場整備事業は、ＮＴＴ関連の大型補正予算の結果、年度途中にその予定面積を大幅に拡大することになった。県教育委員会文化課では、急遽、該当地域内で埋蔵文化財の分布調査を行い、その有無の確認に努めた。伊勢寺町北浦地区では、伊勢寺遺跡が当地区まで広がることが予想されたため、昭和62年11月に試掘調査を行った。その結果、事業地内約80,000㎡に遺跡が存在することが確認された。この結果をもとに県農村整備課と遺跡保護についての協議を重ねたが、排水路部分を中心とする4,115㎡についてはどうしても記録保存せざるを得ないことになった。しかし県教育委員会文化課では、年度当初の発掘予定面積ですでに対応能力を越えており、年度内の調査は困難として再三協議を重ねた結果、排水路部分の西側2,300㎡を松阪市教育委員会に調査を依頼し、残りの東側1,815㎡については工事を延期し、昭和63年度に発掘調査を行うことになった。

第18図　遺跡地形図　（1：10,000）



第19図　調査区位置図　（1：2,000）



第20図　A地区遺構平面図　（1：200）

2．地理的環境

松阪市の西部は、紀伊山地の北東端にあたり堀坂山、観音岳をはじめとする標高600～750ｍの山々が連なっている。これらの山々から東方に広がる伊勢湾へ向かって幾筋もの中小河川が流れている。これらの河川は、伊勢寺町周辺で大規模な複合扇状地を形成する。伊勢寺遺跡はこれらの扇央部から扇端部にかけて広がっている。北浦地区は伊勢寺遺跡の北端部、岩内川とその支流の北村川によって形成された扇状地の扇端部近くに位置する。標高は40ｍ前後で現況は水田である。なお、当遺跡の歴史的環境は「Ⅰ．上相田遺跡」を参照されたい。

3．Ａ地区

1．遺構

調査区西部では、遺構の検出はなく、中央部で奈良時代の竪穴住居３棟、掘立柱建物２棟、時期不明の掘立柱建物１棟、溝１条、東部で室町時代の溝３条を検出した。この他にも２ヶ所でピット群を検出したが、調査区が狭いこともあって、建物としてとらえることができない。

Ａ．奈良時代の遺構

（１）竪穴住居

ＳＨ２　調査区中央で検出した。西半が調査区外であるため全体の規模は不明であるが、南北4.5ｍの隅丸方形を呈するものと思われる。床面南東部で竈の痕跡を検出した。

ＳＨ３　ＳＨ２の東側で検出した。東西3.9ｍ、南北3.3ｍの長方形を呈する。南東隅で直径約１ｍの小土坑を検出した。壁の傾斜は緩やかで、そのため底部では直径約30㎝ほどになる。外側にあたる南東壁は焼土となっており、焼土と炭の混じった砂質土が、土坑内や、それを覆うように堆積している。またこの近辺には多くの土器が散乱している。竈に関連する遺構と考えられるが、確証はない。

ＳＨ４　調査区中央で検出した。東西2.5ｍ、南北2.4ｍの小規模な方形を呈する。床面で弱いながらも焼土を検出した。

（２）掘立柱建物

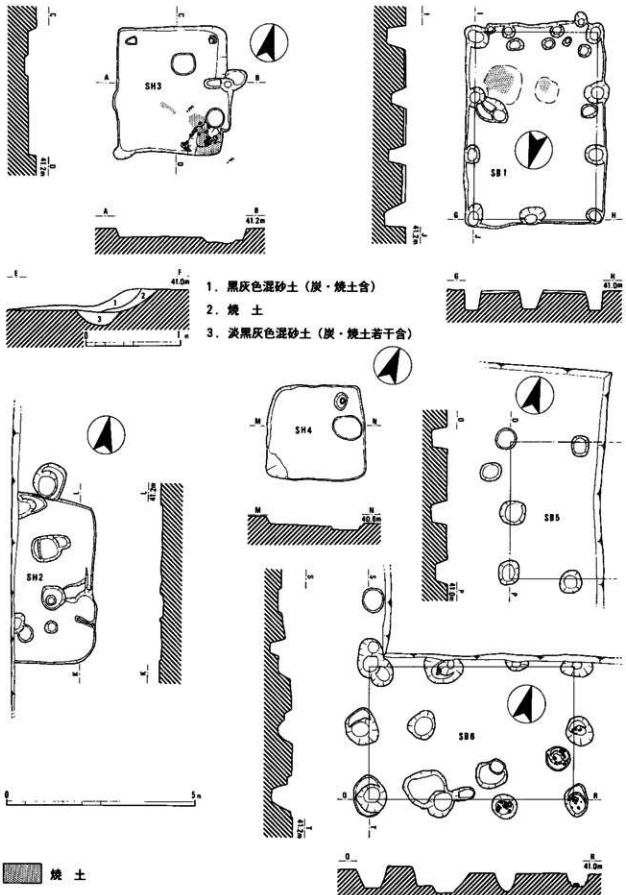
ＳＢ１　調査区の中央部で検出した。桁行３間（約4.9ｍ）×梁行２間（約3.26ｍ）の南北棟であるが、南側梁行は３間となる特殊な形態である。さらに建物内を竪穴状に掘り、白茶色の粘土を貼り広げている。粘土は非常に硬くよく締まっており、床面北側で２ヶ所で焼土となっている。柱掘形は粘土を切って掘られており、竪穴側壁に位置する。柱間は桁行、北側梁行とも1.63ｍの等間であるが、南側梁行は0.89ｍ＋1.33ｍ＋1.04ｍの不等間である。棟方向はＮ12°Ｅである。

ＳＢ５　出土遺物からはこの時代のものと決定できなかったが、この近辺の遺構が全て奈良時代のものであり、棟方向がＳＢ６とほぼ同じＥ８°Ｎであるためこの時代のものとした。調査区中央で検出したが、東側は調査区外に延びているため桁行は１間分しか検出できなかった。梁行は1.8ｍの等間である。

ＳＢ６　桁行３間（5.4ｍ）×梁行２間（3.6ｍ）の東西棟である。棟方向はＥ５°Ｎ柱間は桁行、梁行とも1.8ｍの等間である。柱掘形は直径70㎝～１ｍ

1．茶灰色土（耕作土）　2．1と3の混り　3．黒色土　4．黄褐色粘質土　5．暗茶灰色土
6．3と4の混り（ＳＨ２埋土）　7．若干4の混る3（ＳＨ２埋土）

第21図　Ａ地区土層図　（１：100）



第22図　ＳＨ２、ＳＨ３、ＳＨ４、ＳＢ１、ＳＢ５、ＳＢ６　実測図　（１：100）

の大形のもので、中から小石を検出したものもあり、根石かもしれない。西側梁行を北に延長する位置で柱穴を検出した。北側に庇が付くかもしれない。

（3）溝

ＳＤ７　幅３ｍ～２ｍ、深さ10cm程度の浅い溝である。建物群の北限を示すように東西へ延びるためこの時代としたが、出土遺物もなく確証はない。

Ｂ．堂町時代の遺構

（1）溝

ＳＤ８　南北に延びる溝で、両端は調査区外のため不明である。深さ80cm～45cmで、北側ほど深くなっている。

ＳＤ９・10　調査区東端で検出した。Ｇ地区の調査の結果、ＳＤ９・10は同一の遺構であることが判明した。調査区外東側から緩やかに北へ向きを変え、さらに大きく蛇行して南側調査区外へ延びている。東端では深さ10cm前後と浅いが北端では27cmを、南端では約60cmを測り、急激に深くなっている。

２．遺物

遺物は、整理箱に６箱程度と少なかったが、ＳＨ３とＳＤ８から比較的まとまった出土があった。

Ａ．奈良時代の遺物

図示できたものはすべてＳＨ３出土である。

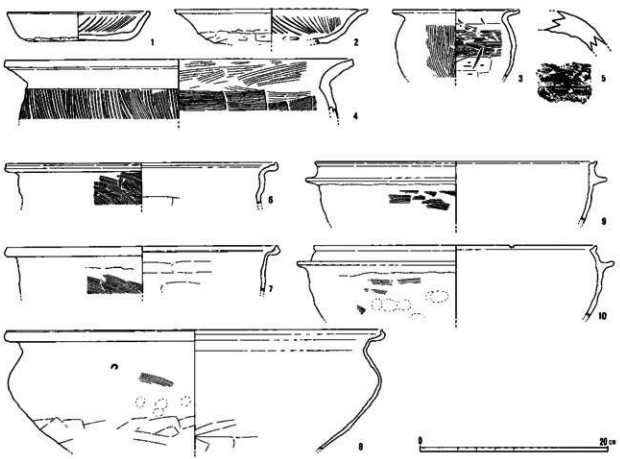
〈土師器〉

杯（１）　摩滅が激しいためラセン暗文は確認できなかった。底部外面はヘラケズリされる。

甕（３），（４）　（３）は口径13.3cmの小型のもの、（４）は口径37cmの大型のもので長胴甕になるものと思われる。両者ともハケメにより調整され、外面のハケメの方が粗い。特に（４）のものは３本／１cmと非常に粗いもので、口縁部内面も同一原体と思われる。また、体部内面のハケメは深くえぐるように行っている。（３）の内面では、工具のあたり痕が観察でき、外面は口縁端部まで煤の付着がある。

高杯（２）　脚部を欠損している。大きく外反する杯部で、外面下半はヘラケズリされる。

瓦（５）　丸瓦の小片である。外面ヘラケズリ、内面には布の絞り痕が明瞭に残る。



第23図　Ａ地区出土遺物実測図（１：４）１～５はＳＨ３、６～10はＳＤ８　出土

B．室町時代の遺物

図示できたものはすべてＳＤ８出土である。

〈土師器〉

鍋（６）～（８）　口縁部が短く外反するもの（６）、（７）と「く」字状に屈曲して外反するもの（８）がある。口縁端部は、（６）が内に巻き込み気味で外面に凹線を施し、（７）は折り返し、（８）はつまみ上げと様々である。調整は、いずれも外面７本／１cmの細かいハケメであるが、（８）は未調整の部分も多く残す。（６）の内面下半はヘラケズリされるが、（７）は頸部内面は指によるえぐるような強いナデ、他は浅いヘラケズリともとれるナデである。（８）の体部下半は、内外面ともナデととれるほど浅いヘラケズリである。（８）の肩部には竹管状の工具で穿孔を試みた痕跡がある。三者とも外面には煤が付着している。

羽釜（９），（10）　口縁部が短く直立するもの（９）、内傾するもの（10）がある。両者とも上端部は面をもち、釜がのるものと思われる。調整は両者とも外面ハケメ、内面ナデで、鍔以下には煤が付着する。（10）の口縁上端部には棒状工具により押圧されたくぼみがあるが、乾燥時についたものと考えられる。

4．Ｂ　地　区

松阪西部中学校の南側に接する、幅４ｍ、全長300ｍのトレンチである。遺構は全く検出されず、遺物も山茶碗がトレンチ東端のＦ地区近くで出土したのみである。

（森川常厚）

5．Ｆ　地　区

幅５ｍ、長さ156ｍのトレンチである。層序は、耕作土（暗褐色粘質土）、明黄褐色土、明褐色砂質土、褐色砂質土、黄褐色混礫土の順で、耕作土から褐色砂質土までは遺物を多く含む。遺構検出は、黄褐色混礫土上面で行った。

１．遺構

調査区西部で竪穴住居２棟、掘立柱建物４棟、溝３条を検出した。調査区が幅５ｍと狭いので、掘立柱建物についてはその規模を確定することができなかった。東部では遺構はまったく検出されなかった。

A．奈良時代の遺構

（１）　竪穴住居

ＳＨ18　南北４ｍ、東西３ｍ、深さ約30cmの長方形を呈し、四隅に小穴があるが、主柱穴は不明である。南側60ｍは、やや浅くなっている。竈は、中心よりやや南に下がった東側で検出された。埋土から完形の須恵器蓋（15）が出土した。

ＳＨ19　北側は調査区外のため全体の規模は不明であるが、東西3.4ｍの正方形に近い形態を呈するものと思われ、深さは約25cmである。床面で１基の柱穴を検出したが、他のものはなく、竈も不明である。埋土から鉄製紡錘車が出土した。

（２）　掘立柱建物

ＳＢ12　調査区やや西よりで検出した。３間×３間（柱間約1.4ｍ）で、柱掘形の直径は約60cmである。直径約30cmの柱痕跡を検出できたものもある。仮に南北棟とした場合の棟方向は、N22°Wである。

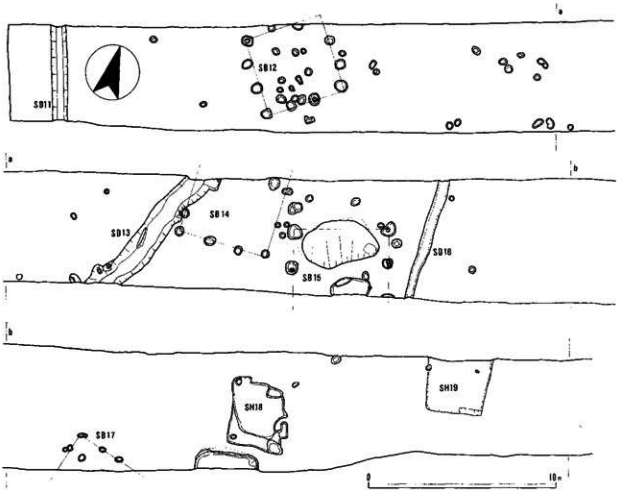
ＳＢ14　３間×３間以上で、柱掘形の直径は60cmを測る。ＳＤ13を切る。仮に南北棟とした場合の棟方向はN、桁行は1.8ｍ、梁行1.6ｍの等間である。

ＳＢ15　南側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、２間×２間以上で、柱間は不等間である。柱掘形は一辺約80cmの不整方形を呈する大形のものである。３基の柱穴で柱痕跡を検出できた。仮に南北棟とした場合の棟方向はN16°Wである。

B．平安時代前期の遺構

（２）　掘立柱建物

ＳＢ17　大部分が調査区外のため、全体の規模は不明であるが、２間以上×３間以上を検出した。柱間は不等間で、柱掘形の直径（約35cm）から考えると、他の掘立柱建物より小規模なものと推定される。



第24図　F地区遺構平面図　（1：200）

仮に南北棟とした場合の棟方向はN17°Eである。

C．鎌倉時代前期の遺構

（1）　溝

SD11　調査区西端を南北に延びる幅約80cm、深さ約50cmの溝で、幅、深さともに均一な整然としたものである。

D．時期不明の遺構

（1）　溝

SD13　幅約1.5m前後、深さ約30cm前後の自然流路的な溝で、調査区を北東から南西に横切っている。SB14に切られる。溝底から縄文土器片が出土しているが、混入と考えられる。

SD16　幅60cm、深さ10cm前後の溝である。SB14と方向がほぼ揃うため、関連する遺構であるかもしれない。

2．遺物

整理箱6箱程度の出土遺物があり、そのほとんどは土器である。しかし、遺構に伴う遺物は少なく、包含層出土の土器が多い。土器は奈良時代の土師器が中心で、平安時代前期の土師器、鎌倉時代前期の山茶椀、晩期後半の縄文土器片等があり、またSH19の竪穴住居からは鉄製紡錘車も出土した。

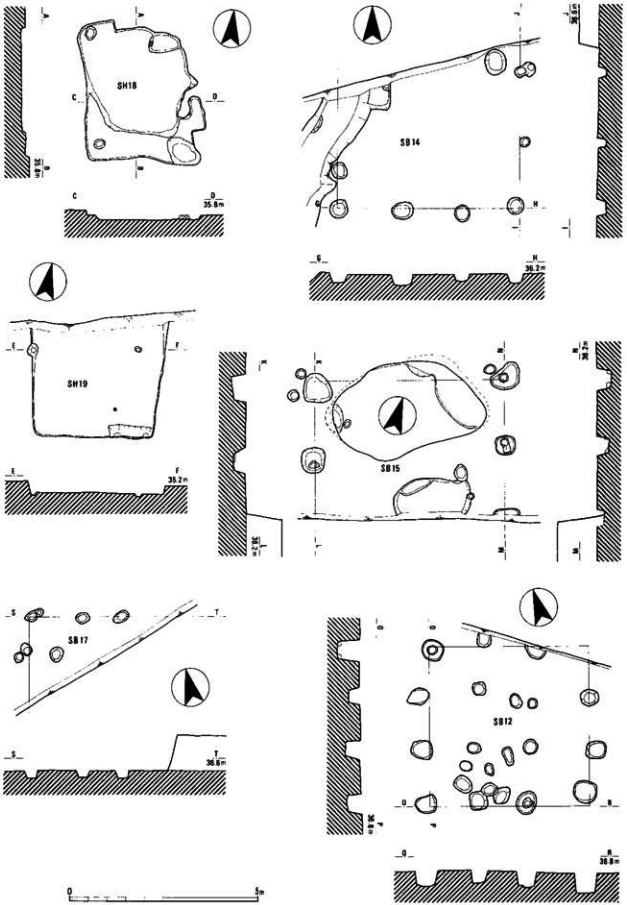
A．奈良時代の遺物

（1）　SH18出土の遺物

土師器の根製椀（11）、皿（12）、甕（13）、（14）、須恵器の蓋（15）がある。（14）は小形で比較的長い口縁部をもつのに対し、（13）は短く屈曲し、端部をつまみ上げる。（15）のつまみは、宝珠つまみであるが、非常に偏平なために、中央が窪んだ形を呈する。

（2）　SB14出土の遺物

土師器の杯（16）、皿（17）、甕（18）、（19）がある。（18）、（19）はいずれも口縁端部を摘み上げる。（18）の頸部外面には、ハケメ調整時の工具の当たり痕が明瞭に残り、やや荒い仕上げである。



第25図　ＳＨ18、ＳＨ19、ＳＢ12、ＳＢ14、ＳＢ15、ＳＢ17実測図　（１：100）

（3）　ＳＨ19出土の遺物

土師器の甕（20）、鉄製紡錘車（21）がある。(21)は、紡輪、紡茎ともそろった完形に近いものである。

（4）　ＳＢ12出土の遺物

図示できるものは、土師器皿（22）のみである。口縁端部内面には浅い１条の沈線が巡るが、調整時のもので、意識的なものではないようである。

Ｂ．平安時代前期の遺物

（1）　ＳＢ17出土の遺物

土師器の杯（23)、(24）がある。両者とも口縁部は大きく外反し、底部外面は未調整であるが、(24）は非常に深い形態である。

Ｃ．鎌倉時代前期の遺物

（1）　ＳＤ11出土の遺物

図示できるものは、山茶椀（25）のみである。高台の接地面には籾殻痕が残る。

Ｄ．包含層出土の遺物

縄文土器（26）と土師器の皿（27）がある。(26）はＳＤ13出土であるが、混入と考えられる。外面には二枚貝による条痕を施し、内面はナデ消しているようである。晩期後半のものと考えられる。(27）は強いヨコナデのため、体部との境が弱い段を呈している。

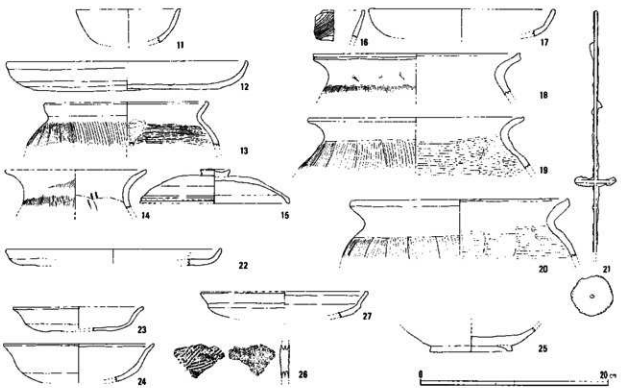
（江尻　健）

6．Ｇ　地　区

Ｇ地区は、Ａ地区の北に接する調査区である。層序は、耕作土、床土、茶褐色土（包含層)、暗茶褐色土、黄色粘土（地山）の順で、地表から60cm～80cmで地山にいたる。遺構は茶褐色土下から切り込んでいるものがほとんどであるが、検出が容易なため黄色粘土上面で行った。

1．遺構

飛鳥時代～室町時代の竪穴住居、掘立柱建物、溝等を検出したが、すべて調査区南部からで、特に調査区南東部で集中して検出された。調査区北部では、小穴を検出したにとどまり、調査区をトレンチに縮小して行った。



第26図　Ｆ地区出土遺物実測図　（１：４）　11～15はＳＨ18、16～19はＳＢ14、20、21はＳＨ19、22はＳＢ12
23、24はＳＢ17、25はＳＤ11、26はＳＤ13、27は包含層出土

A．飛鳥時代の遺構

（1）竪穴住居

ＳＨ24　調査区南東部で検出した。東部をＳＨ27に切られるため全体の形態は不明であるが、一辺約3.6mの方形を呈するものと考えられる。主柱穴は検出できなかった。北辺中央に焼土があり、竈の痕跡と考えられるが、この焼土はＳＨ27に切られておらず、ＳＨ27に伴うものと重複しているようである。

ＳＨ25　調査区南東端で検出したため全体の形態は不明であるが、一辺約5.5mの方形を呈するものと考えられる。北辺中央で焼土を検出したが、この焼土内から出土した土師器杯（40）は、外反して端部が内傾するLI縁部の形態や底部外面にヘラケズリが認められない等から斎宮のＳＫ1445[9]かその前後に並行するものと考えられる。したがってＳＨ25に伴う焼土とは考えられず、形態を検出できなかったが、平安時代初～前期に属する竪穴住居が重複していたようである。

ＳＦ36　調査区東部の中央で検出した焼土である。焼土の範囲は直径60cmほどで、付近から土師器杯（28）、皿（29）、甕（30）が出土しており、竪穴住居の竈の痕跡と推定される。

B．奈良時代の遺構

（1）竪穴住居

ＳＨ27　調査区南東部でＳＨ24・25と重複して検出された。遺物によれば、先行するＳＨ24・25を切ることになるが、ＳＨ25については明確ではない。一辺4.5mの方形を呈するものと考えられ、西辺中央に焼土があり、竈の痕跡と考えられる。

ＳＨ29　調査区南東部でＳＨ25・27と重複して検出された。両者を切り、南北３ｍ、東西2.5ｍの正方形に近い長方形を呈する。東壁中央と西壁近くの２ヶ所で焼土を検出した。しかし、どちらがこの住居に伴うものかは不明である。検出面からの深さは30cmほどであるが、東側は60cmもあり、別の土坑の重複かもしれない。

（2）土坑

ＳＫ32　直径2.6ｍ～３ｍの不整円形を呈する。検出面からの深さは10cm～15cmで、中央がやや深いもののおおむね平らである。

ＳＫ37　調査区中央北側で、他の遺構とはやや離れて検出された。直径1.6ｍ～２ｍの不整円形を呈し、深さは検出面から1.1ｍを測る深いものである。埋土は４層に分かれ、厚さ40cmの第Ⅰ層：暗茶色土、その下に第Ⅱ層：茶色土、第Ⅲ層：黄褐色土、第Ⅳ層：黒色粘土が厚さ10cm～20cmで続くが、遺物は第Ⅰ層、第Ⅱ層から出土し、第Ⅲ層、第Ⅳ層からは出土していない。したがって土坑の底は、第Ⅲ層上面の可能性もある。その場合の深さは70cmほどである。しかし、第Ⅲ層の黄褐色土は非常に不安定であるため、埋土と考えている。素掘りの井戸と考えられなくもないが確証はない。

C．鎌倉時代の遺構

（1）土坑

ＳＫ21　調査区南端で検出した。南側をＳＤ９・10に切られるが、東西1.1ｍ、南北1.1ｍ以上の隅丸長方形を呈するものと考えられる。東に接して同様な遺構ＳＫ22がある。不慮にして１個石を取り上げてしまったが、40cmほどの細長い石を３個、「コ」字状に配置している。遺物は出土しなかったが、包含層から完形の土師器皿３枚が出土しており、この土坑に埋納されたものかもしれない。

ＳＫ22　ＳＫ21の東に接して検出された。形態はＳＫ21と同様で、やはり南側をＳＤ９・10に切られる。深さが検出面から40cmほどであるが、やや掘りすぎたようで、ＳＫ21と同様20cmほどであったものと考えられる。ＳＫ21と同様に石を配置しているが、東西両壁に２段に石を積み上げ、あたかも石室状を呈している。中央北寄りに土師器皿２枚（64）、（65）を正立状態に南北に並べて埋納している。

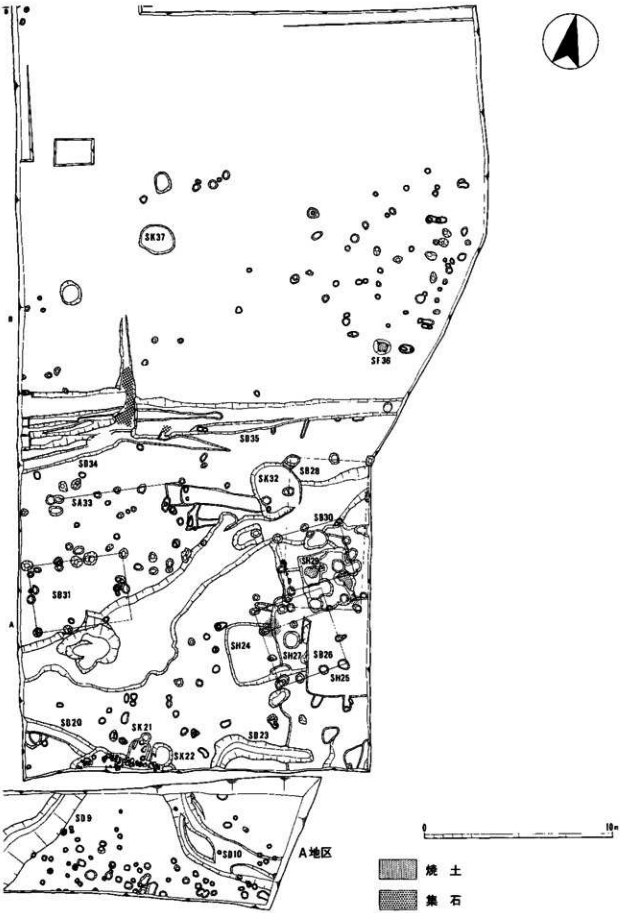
（2）溝

ＳＤ34　調査区中央で検出した逆「Ｌ」字状に屈曲する溝である。幅60cm、検出面からの深さ20cmほどの小溝である。埋土は全てが小石である部分があり、区画溝とも暗渠排水とも考えられる。

D．室町時代の遺構

（1）掘立柱建物

ＳＢ26　梁行２間の東西棟と考えられるが、桁行の南側が３間、北側が２間の変則的な建物である。北側には庇が付き、柱穴は直径40cm～50cmの円形を呈し、庇の柱穴はやや小さく直径40cm以内である。柱間は不等間で、棟方向はＥ31°Ｎである。



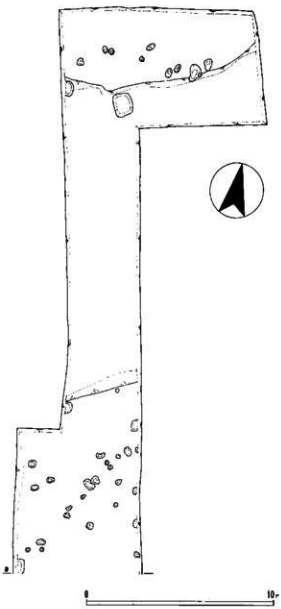
第27図　G地区遺構平面図　（1：200）

ＳＢ30　柱穴からは室町時代の遺物は出土していないが、ＳＢ26と方向が同様なため、この時代に属するものと考えられる。２間×２間の東西棟で、柱間は不等間、棟方向はＥ28°Ｎである。柱穴は直径40cm～50cmの円形で、検出面から60cm～70cmほどしっかり掘り込まれている。

ＳＢ31　ＳＢ30と同様、ＳＢ26と方向がほぼ同じであるため、この時代に属するものとした。３間×２間の東西棟で、棟方向はＥ20°Ｎである。桁行は不等間であるが、梁行は1.8mの等間である。柱穴は、直径50cm～60cmの円形を呈する。

（２）柱列

ＳＡ33　ＳＢ31の北に3.4m離れて、東西に延びる柱列である。柱穴は直径30cm～60cmの円形で、方向はＥ20°Ｎである。ＳＢ31と方向が一致するため、これに伴うものと考えられる。



第28図　Ｇ地区遺構平面図　（１：200）

（３）溝

ＳＤ23　調査区南端で検出した「Ｌ」字状に屈曲する溝である。南側は調査区外へ続いているが、Ａ地区では検出されておらず、調査区端で止まるものと推定される。幅90cm、深さは検出面から60cm前後の深いものである。

Ｅ．時期不明の遺構

（１）掘立柱建物

ＳＢ28　検出できなかった柱穴もあるが、４間×２間の南北棟に推定した。棟方向はＮ10°Ｗである。他の建物より大規模で、柱穴も大きく、直径50cm～70cmを測るが、形態は円形または方形と多様である。柱間も不等間であり、建物とするに疑問もある。南東角の柱穴の上面には焼土が及んでおり、この焼土より先行するものであることがわかる。前述したように、この焼土が平安時代初期～前期に属することからそれ以前のものである。Ａ地区、Ｆ地区で奈良時代の建物が検出されていることから、この時代に属する可能性が大きい。

（２）溝

ＳＤ20　調査区南端を東西に延びる溝である。西側は調査区外に続き、東側はSD９・10に切られる。幅60cm、深さは検出面から30cmほどである。ＳＤ９・10に切られることから室町時代以前のものである。

ＳＤ35　調査区中央を東西に延びる溝で、両端とも調査区外へ続いている。幅１m前後、検出面からの深さ60cmで、少なくとも３回以上掘り直されている。西側では、掘り直しの度に方向のずれが認められる。埋土からは常時水が流れていた様子は認められず、何かを区画していたものと考えられる。ＳＤ34に切られることから鎌倉時代以前のものであり、ＳＢ28と方向がほぼ揃うことから同時期の可能性もある。

２．遺物

遺物は整理箱に20箱程度出土した。

Ａ．飛鳥時代の遺物

（１）　ＳＦ36出土の遺物

(28) は土師器の杯、(29) は皿、(30)は甕である。

(28) は口縁部と底部の一部を欠損しており、器形の復元は推定で行った。暗文は、底部近くの体部内面を横方向に平行に行い、その後放射暗文→ラセン暗文の順に施している。(29) の内面にはハケメが明瞭に残る。(30) の体部と口縁部の接合は雑である。

（２） ＳＨ24出土の遺物

(31) は土師器の杯、(32) は甕、(33) は須恵器の蓋である。(31) の内面は、放射暗文とラセン暗文を２段に施し、口縁端部外面に１条の沈線を巡らす。(32) の体部外面には、記号と思われる１条のヘラ沈線が施されている。

（３） ＳＨ25出土の遺物

〈土師器〉

杯 (40)　摩滅が激しいが、底部外面はナデにより調整されるものと考えられる。他のものとは時期差があり、平安時代に属するものと考えられる。

皿 (41), (42)　両者とも底部から屈曲して立ち上がる口縁部の端部は外反するが、(41) は、全体に厚く仕上げられている。摩滅が激しいが、底部外面はナデにより調整されるものと考えられる。(42) の底部外面には「⊗」のヘラ記号が刻まれている。焼成後の鋭利な工具によるものと考えられる。

蓋 (46)　平胆な天井部を呈するものと考えられ、つまみ側面には指頭圧痕を残す雑な仕上げである。

甕 (43) ～ (45)　口径15cmの小形のもの (43)、25cmの大形のもの (44)、鍋に近い形態のもの (45) がある。(45) は小片からの推定のため、もう少し口径が小さい可能性もある。また、体部外面下半のハケメは、ヘラケズリ状に非常に強く施されている。

高杯 (48)　杯部外面にハケメを残し、暗茶色を呈する粗製の高杯である。

〈須恵器〉

図示できたものは、蓋 (47) のみである。

Ｂ．奈良時代の遺物

（１） ＳＨ27出土の遺物

(34) は土師器の杯、(35)、(36) は高杯である。(34) のラセン暗文は２重に施されている。外面はヘラケズリで調整するものの、粘土紐接合痕が残る。(35)、(36) は接合しなかったが、色調、胎土が酷似しており、同一個体の可能性がある。(36) は面取りの意識は認められるものの不明瞭で、板状工具によるものと思われる縦方向の不規則な沈線が残る。また、筒部と裾部の接合も雑である。

（２） ＳＫ32出土の遺物

(37) は土師器の杯、(38)、(39) は甕である。(37) の口縁部のヨコナデは、底部内面中央近くにまで及んでいる。(42) は口縁端部外面にハケメが残り、内面のハケメは１cmに20本の非常に細かいものである。

（３） ＳＨ29出土の遺物

〈土師器〉

杯 (49)　口縁部は、２段にヨコナデされる。

皿 (50)　口縁部は、内弯して内に肥厚する。

甕 (51) ～ (54)　(53)、(54) は長胴になるものと考えられる。(52) のハケメは１cmに４本の粗いものであり、(54) の外面では、原体が確認でき、1.6cmに８本である。内面は板状工具によりナデられるが、浅いハケメととることもできる。(51) の体部外面には「ϟ」のヘラ記号が刻まれている。

甑 (55)　体部内面上部はナデで調整されるが、ハケメが若干残る。

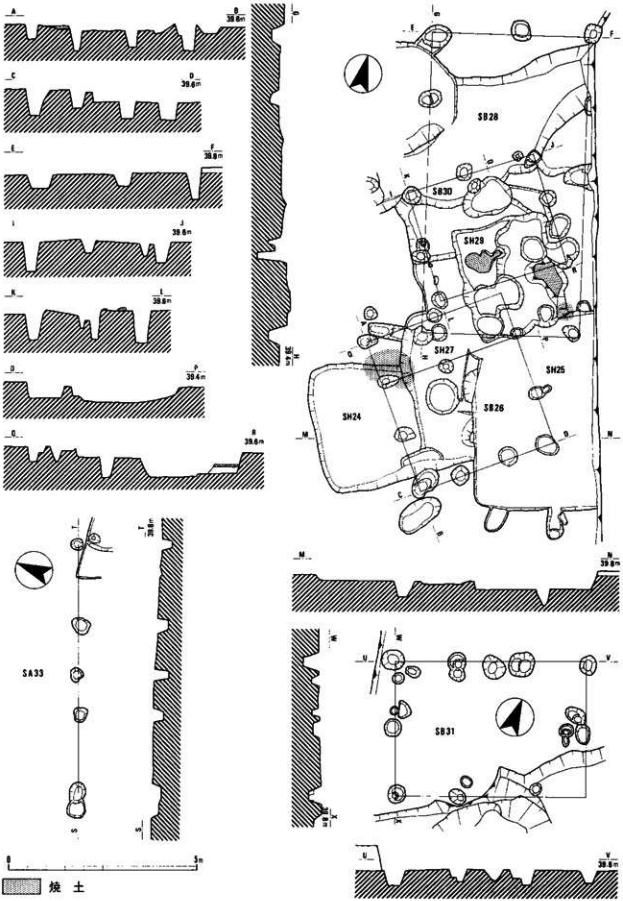
〈鉄製品〉

釣針 (56) ～ (59)　(56) ～ (59) は、錆が激しく分離できなかったが、無鐶の単式釣針と考えられ、ちもとはそのままおわるものと考えられる。

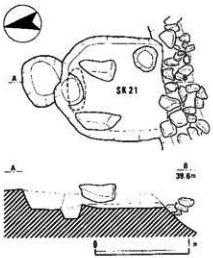
鉄鎌 (60)　平基有茎で、正三角形にちかい五角形を呈する。

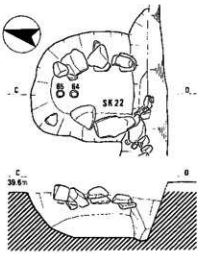
1. 灰褐色土（耕作土）　2. 赤褐色土（床土）　3. 茶褐色土（包含層）　4. 暗茶褐色土　5. 黄色粘土（地山）
6. 暗黄茶色土　7. 黒茶色土　8. 5と茶褐色土の混り　9. 5と茶褐色砂質土の混り　10. 暗黄茶色土
11. 黒褐色土　12. 暗灰茶色土

第29図　Ｇ地区土層図　（１：100）



第30図　ＳＨ24、ＳＨ25、ＳＨ27、ＳＨ29、ＳＢ26、ＳＢ28、ＳＢ30、ＳＢ31、ＳＡ33　実測図　（１：100）





第31図　ＳＫ21、ＳＫ22　実測図　（１：40）

Ｃ．鎌倉時代の遺物

（１）　ＳＤ34出土の遺物

山茶椀（62）、青磁椀（61）、須恵器甕（63）がある。(61) の外面には、連弁文が浮き彫りにされ、(62) の高台接地面には籾殻痕が認められる。(63) は混入と考えられ、外面には棒状工具による１条の沈線と同一工具による波状文が左回りに施文される。

（２）　ＳＫ22出土の遺物

出土したものは埋納されたものと考えられる土師器皿（64）、(65) である。両者とも雑な成形ではあるが、口径はほぼ同じである。

Ｄ．包含層出土の遺物

〈縄文土器〉

（66）～（69）があり、(66)、(68)、(69) は中期、(67) は後期に属するものと考えられる。(66) は、隆帯による区画内に羽状沈線を施す。羽状沈線は、一部３段以上で隆帯上にも及んでいる。(67) の口縁部は波状を呈するものと思われ、沈線と擦り消し縄文で施文される。縄文はＬＲである。(68) は、口縁端部直下に２条の凹線を巡らし、その下に刺突文を施している。刺突は半截竹管により、斜め右方向から施している。(69) は、凹線を巡らし、その間に刺突文を施す。刺突は斜め右方向から行っている。

〈土師器〉

杯（70）～（73）　口縁部が外反するもの（70）、外反して端部で内弯するもの（71）～（73）がある。前者は底部外面をヘラケズリするが、後者はナデか未調整である。(73) の口縁端部外面には１条の浅い沈線が巡る。

皿（74）～（76）　いずれも口径８㎝弱の小皿である。内面のみナデ調整するが、(76) は口縁端部外面までナデが及ぶ。(75) の底部外面には籾殻圧痕が若干認められる。

鍋（77）　外面のハケメは１㎝に５本のやや粗いもので、煤の付着がある。

〈ロクロ土師器〉

図示できたものは（78）のみである。底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。

〈須恵器〉

図示したものは（79）のみである。宝珠つまみが付くものと考えられる。

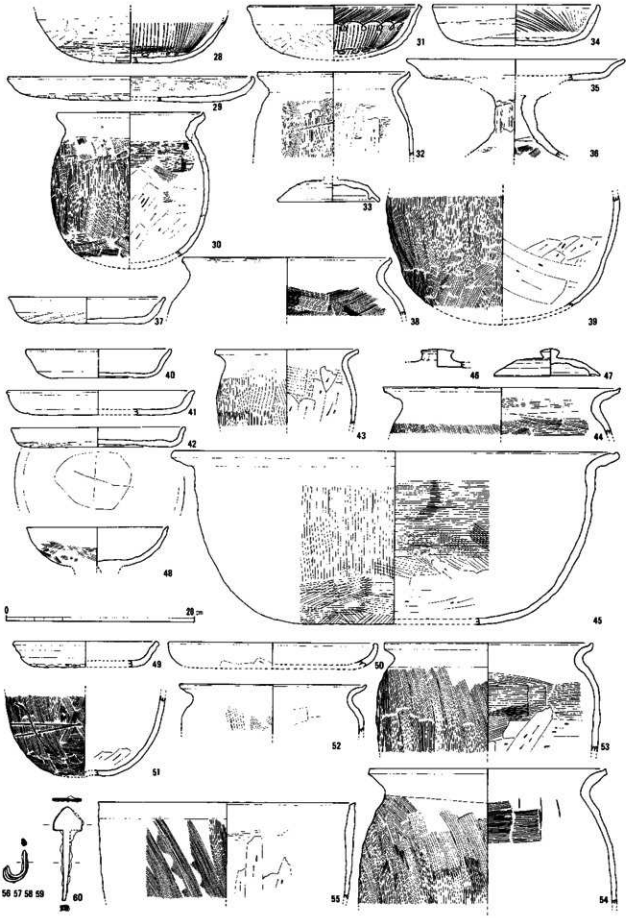
〈青磁〉

図示したものは（80）のみである。高台は削り出され、全面に施釉される。

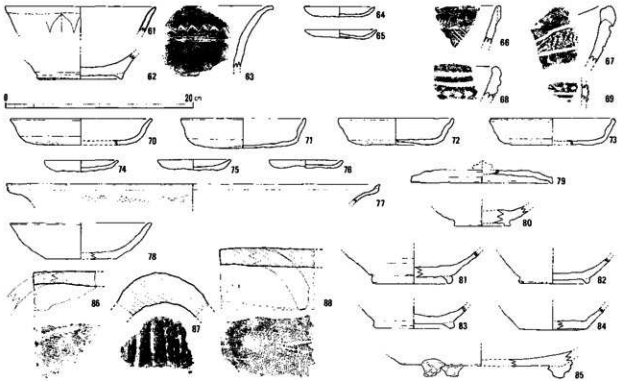
〈山茶椀〉

椀（81）～（84）　高台を張り付けるもの（81）～（83）、高台の無いもの（84）がある。(81) の高台は比較的高く、見込みには輪状に煤状のものが付着している。また、内面は（81）のみナデられるが、他のものは未調整で、糸切り痕が残る。(82) の高台接地面には、籾殻痕が認められ、(81) ～ (83) の内面には自然釉がかかる。

脚付鉢（85）　ロクロケズリで調整された平らな底部に、手ずくねの脚を張り付ける特殊な形態である。脚は雑に張り付けられており、その時の指頭圧痕が残る。脚は３足で図化しているが、４足の可能性もある。



第32図　G地区出土遺物実測図　（1：4）　28～30はＳＦ36、31～33はＳＨ24、34～36はＳＨ27、37～39はＳＫ32、40～48はＳＨ25、49～60はＳＨ29出土



第33図　G地区出土遺物実測図　　61～63はＳＤ34、64、65はＳＫ22、68はＳＨ29、69は小ピット、他は包含層出土

〈瓦〉

（86）～（88）があり、いずれも小片であるが、丸瓦と考えられ、（88）は行基瓦である。（86）の内面には布の絞り目が残り、（87）は模骨痕が認められるが、欠損部近くでは布目も観察できる。模骨１本の幅は約１cmである。

7. 結　語

伊勢寺遺跡北浦地区は、伊勢寺遺跡の北西端に位置する。そして調査結果もそれを立証するものであった。Ｂ地区では遺構は全く検出されず、遺物もＦ地区よりで若干の山茶椀が出土したのみで、当調査区は遺跡外に位置するものと考えられる。また、Ａ地区、Ｇ地区においては、遺構は調査区南部から検出されており、遺跡の北限を示すものと考えられる。Ｆ地区東部でも遺構は検出されていないが、表土には多数の遺物の散布があり、既に削平されてしまった可能性が強い。また、遺構を検出できた部分でもその密度は低く、遺跡の縁辺部であることを表しているものと考えられる。

遺構は、飛鳥時代から平安時代前期に属するものと、鎌倉時代から室町時代のものに分かれる。前者は、竪穴住居と掘立柱建物、後者は掘立柱建物が中心である。また、Ａ地区のＳＨ２～４、ＳＢ１・５・６は、方向をほぼ揃えて建てられており、同時に存在した可能性が高い。奈良時代、当遺跡では竪穴住居と掘立柱建物が混在していた様子がうかがえる。ＳＢ１は、建物内を竪穴状に掘り下げ、粘土を貼る特殊な構造をもつ。類似する構造としては、大鼻遺跡で検出された竪穴住居7[29]がある。鎌倉時代に属し、ＳＢ１とは大きな時期差があるが、竪穴内に粘土を貼る点は共通している。平面形態も両者とも長方形を呈し、３間×２間であることも共通するが、竪穴住居７では総柱となっている。両遺跡とも、この様な形態の建物は１棟しか検出されていないことからも一般住居とは考え難く、特殊な用途に使用されたものと考えられる。しかし、ＳＢ１床面に残る焼土が、その使用時の痕跡を僅かにとどめるのみである。

全地区とも遺物の出土量は少なく、良好な一括資料に乏しい。そのなかでは出土例の少ない飛鳥～奈

良時代の鉄製品が注目される。鉄製紡錘車は、県内では上寺遺跡[3]、斎宮跡[4]、寺垣内館址[5]等から出土しているが、完形のものはなく、その点では県内唯一の貴重な資料である。鉄鏃、釣針がG地区ＳＨ29から出土したが、遺構の重複が激しく、混入遺物も多いことから、奈良時代とするに疑問も残る。しかし、重複する遺構の時期から、飛鳥～平安時代前期までにおさまるものである。鉄製釣針については、福岡県海の中道遺跡から多数出土し、その分類がなされている。[6]それによると当遺跡のものは、小型で鐎がなく、軸部の短いⅡ類ｃに属することになる。Ⅱ類とされるものは、樹皮で束ねた釣針で、イカ、タコ用の疑似餌である可能性が指摘されている。当遺跡のものは、４本が錆により接着しているが、樹皮は確認できないものの、元来束ねられて使用されていたものであるならば、Ⅱ類に属する可能性も大きくなる。当遺跡から海岸までは約７km離れているが、イカ、タコ類を目的とした漁労に出張していたものなのか、同様な疑似餌が淡水魚にも有効であったのか、当時の生活を知るうえで興味深い資料である。

（森川常厚）

[註]

① 三重県斎宮跡調査事務所「斎宮跡の土師器」「史跡　斎宮跡・三重県斎宮跡調査事務所年報1984」　昭和60年３月

② 三重県教育委員会「一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要」　1987. 3

③ 山田猛「上寺遺跡」「昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会　1980. 3

④ 三重県斎宮跡調査事務所「史跡　斎宮跡・三重県斎宮跡調査事務所年報1987」　昭和63年３月

⑤ 下村登良男「寺垣内館址」「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1970

⑥ 山崎純男「海の中道遺跡・福岡市埋蔵文化財調査報告第87集」福岡市教育委員会　1982

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
1	ＳＨ３	ＳＢ３ No.1	土師器	杯	口径15.0 器高 3.1	平な底部から屈曲ぎみに立ち上がる口縁部をもつ	底部外面ヘラケズリ、口縁部内面放射暗文	明赤色	雲母微片若干含	1／2	磨滅により、ケセン暗文の有無は不明	013-02
2	＊	ＳＢ３	＊	高杯	口径20.0	大きく外反する口縁部で端部は外に面をもつ	杯部外面下半ヘラケズリ、内面放射暗文とケセン暗文	赤茶色	＊	脚部欠損 杯部片	磨滅により、ケセン暗文不明瞭	013-03
3	＊	ＳＢ３ 地土内 No.3	＊	甕	口径13.3	球形の体部に大きく水平近く外反する口縁部がつき、端部は弱くつまみ上げる。	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ	黄茶色	1 mm以下の砂粒若干含	1／3	外面の一部に煤付着	013-04
4	＊	ＳＢ３ No.3	＊	＊	口径37	「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	淡赤茶色	2 mmの砂粒若干含	1／4		013-01
5	＊	ＳＢ３ 地土内３層	丸瓦	丸瓦	—		外面ヘラケズリ、内面布目が残る。	暗茶色	3 mmの砂粒多含	小片		013-05
6	ＳＤ２	78-15-20 SD	土師器	鍋	口径28.9	大きく水平近く外反する口縁部で端部は巻き込み気みにまとめる。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	淡黄茶色	雲母	1／10	外面煤付着	014-01
7	＊	＊	＊	＊	口径28.9	短かく水平近く外反する口縁部で端部は折り返す。	外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明赤茶色	1 mmの砂粒若干含	小片	外面煤付着	014-02
8	＊	＊	＊	＊	口径40	水平近く外反する口縁部で端部はつまみ上げる。	外面若干ハケメを施すが本調整、下半はヘラケズリ、内面ナデ、下半ヘラケズリ	暗茶色	精良	1／4	外面煤付着	015-02
9	＊	＊	＊	鉢	口径30	体部からそのまま直立する口縁部で、上端部に弱い段をもつ。	外面ハケメ、内面ナデ	淡茶色	雲母微片若干含	1／6	胴以下に煤付着	14-03
10	＊	＊	＊	＊	口径30	球形に近い体部で、口縁部も内傾し、端部のみ外に屈曲する。	外面一部ハケメを施すが、未調整、内面ナデ	暗茶色	精良	1／4	胴以下に煤付着	15-01
11	ＳＨ18	B-19 SK-2	＊	鉢	口径13 器高 4.3	半球状の体部で、口縁端部は内に弱い面をもつ。	体部外面弱いナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明黄褐色	荒	1／3		016-7
12	＊	B-19 SK-1	＊	皿	口径26 器高 3.2	底部から内弯ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚する。	—	内：黄褐色、外：明赤褐色	若干砂粒含	2／3	調整不明	016-9
13	＊	＊	＊	甕	口径17	「く」字に屈曲する口縁部で、端部はつまみ上げる。	外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	暗灰褐色	良	小片		016-5
14	＊	B-19 SK-1-D	＊	＊	口径15	体部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明灰褐色	＊	1／4		016-10

表４　遺物観察表（1）

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
15	SH18	B－19 SB1－A	須恵器	蓋	口径16 器高 3.5	丸味をもつ天井部で中央が四ちつまみを張り付ける。	天井部外面1／2をロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	砂粒含	ほぼ完形	ロクロ右回転	016－8
16	SB14	B－13 SK1	土師器	杯	―	口縁端部は内に肥厚する。	外面ヘラミガキ、内面放射暗文	赤褐色	良	小片		017－15
17	*	*	*	皿	口径30 器高 3.5	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	―	*	*	*	調整不明	017－17
18	*	B－13 pit 1	*	甕	口径22	体部から屈曲ぎみに外反する口縁部で、端部は若干つまみ上げられる。	体部外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明黄褐色	荒	1／4		017－14
19	*	B－13 A－C土手	*	*	口径23	体部から外反する口縁部で、端部はつまみ上げられる。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	明褐色	*	1／5		017－13
20	SH19	A－22 SK－1,D	*	*	口径23	体部から「く」字に屈曲して外方へ開く口縁部で端部はつまみ上げられる。	*	*	良	1／3		017－11
21	*	*	鉄製品	紡錘車	紡軸径 4.2 紡軸厚 0.3 紡重量36	棒状の軸芯に円盤状の紡軸がつく。		―	―	ほぼ完形	残存重36g	017－12
22	SB12	B－5 pit 1	土師器	皿	口径23 器高 1.7	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	口縁部強いヨコナデ	明黄褐色	良	1／10		016－1
23	SB17	B－29 南壁中	*	*	口径14 器高 2.7	平な底部から丸味をもって立ち上がり、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	明褐色	*	1／4		016－3
24	SB17	B－30 包	*	*	口径18 器高 4.3	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は大きく外反する。	底部外面未調整、口縁部ヨコナデ	*	*	1／3		016－4
25	SD11	A－2 溝中	山茶椀	椀	高台径 8.6	比較的高い角形高台を張り付ける。	底部外面糸切り後糸調整、他はロクロナデ	明灰色	荒	底部完存		016－2
26	SD13	A－11 溝底	縄文土器	―	―		外面2枚具条痕、内面条痕ナデ消し	明褐色	荒	小片	混入か。	017－17
27	包	B－18－20	土師器	皿	口径16 器高 3.2	底部から開い段をもって外反する口縁部をもつ。	外面未調整、内面ていねいなヨコナデ	赤褐色	良	1／5		016－6
28	SF30	M－6 包	*	杯	―	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。	外面ヘラケズリ、一部ヘラミガキ、内面横方向の平行暗文後、放射とラセン暗文	赤茶色	雲母微粒子 微砂若干含	体部1/4		001－03
29	*	M－6 SK1	*	皿	口径25.9 器高 2.5	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚し、外に面をもつ。	外面ヘラケズリ、内面ハケメ、口縁部ヨコナデ	*	2mmの砂粒含、雲母微粒子若干含	1／3		001－02
30	*	*	*	壺	口径15.5 器高16.4	球形に近い体部から短かく外反する口縁部で、端部はつまみ上げ、外に面をもつ。	体部外面縦方向のハケメ、内面上半横方向のハケメ、下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	茶色	雲母微粒子多含	口縁部 1/4欠損		001－01
31	SH34	Q－4 SB1	*	杯	口径17.9 器高 5.8	丸味をもつ底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部はつまみ上げる。	体部外面ヘラケズリ、内面ラセン暗文と放射暗文を二段に施す。	暗赤色	雲母微粒子を若干含む	小片	小片のため口径、器高は不確実	002－07
32	*	SB1 統土中	*	壺	口径16	体部から「く」字に屈曲し、外方へ開く口縁部で端部はつまみ上げ、外に面をもつ。	体部外面縦方向のハケメ、内面横方向のハケメ後、端なへラケズリ	赤茶色	3mmの砂粒含	1／6	体部外面に一条のヘラ沈線あり	003－02
33	*	Q－4 包	須恵器	蓋	口径10.9	丸味をもつ天井部で、かえりは口縁端部より短かい。	天井部外面1／2をロクロケズリ、内面中央仕上げナデ、他はロクロナデ	灰褐色	雲母微粒子若干含	つまみ欠損	焼成不良	002－03
34	SH27	Q－5 SB2	土師器	杯	口径17.4 器高 4.3	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干内に肥厚する。	底部外面ヘラケズリ、内面放射暗文とラセン暗文、口縁部ヨコナデ	橙褐色	雲母微粒子若干含	1／2	粘土接痕立痕が残る。	002－06
35	*	F－4 SB2	*	高杯	口径23	浅い杯部で、口縁部は大きく外反する。	杯部内面ナデ、外面弱いヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	明赤茶色	1mmの砂粒含	口縁部½ 雲母片含	35と同一個体か。	002－08
36	*	F－5 SB2 No.1	*	*	脚部径 4.2	短かい脚部から大きく開く脚が付く。	脚ナデ、内面ハケメ	*	2mmの砂粒若干含、雲母微粒子含	脚部完存	35と同一個体か。	001－04

表5　遺物観察表 (2)

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
37	SK32	O－4 SK1№1	土師器	杯	口径16.4 器高 2.8	平らな底部から緩曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干肥厚して丸くおさめる。	外面ヘラケズリ、底部内面中央近くまでヨコナデ	橙褐色	精良	完形		002－05
38	＊	O－4 SK1№2	＊	甕	口径21.8	外反する口縁部で、端部はつまみ上げられ、外に面をもつ。	外面不明、口縁端部にハケメが残る。体部内面ハケメ。	淡茶色	雲母微粒子を含む。	1／4	外面剥離が激しく調整不明	004－02
39	＊	G－4 SK1№2	＊	＊	—	丸底の底部をもつ。	外面ハケメ、内面下半ヘラケズリ、上半ナデ	茶色	2mmの砂粒含	2／3		004－01
40	SH35	P－6 SB4 焼土中	＊	杯	口径15.2 器高 3	平な底部から屈曲し、外反して立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。	底部内外面ナデか、口縁部ヨコナデ	暗茶色	雲母微粒子含	1／2	磨滅が激しく調整不明確	007－02
41	＊	P－5 SB4	＊	皿	口径19.8 器高 2.6	厚い器壁で、平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部の端部は外傾する。	＊	明黄赤色	雲母微粒子を若干含む	1／7	磨滅が激しく調整不明確	007－06
42	＊	Q－5 SB3№1	＊	＊	口径18.5 器高 2.1	平らな底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、端部は若干外反する。	底部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	桜乳褐色	精良	完形	底部外面にヘラ記号	003－01
43	＊	P－5 SB4	＊	甕	口径15	体部からゆるやかに外反する口縁部で、端部は外に開い面をもつ。	体部外面ハケメ、内面ハケメ後ヘラケズリ	淡黄茶色	1mmの砂粒若干含、雲母片含	口縁部小片頸部½		007－01
44	＊	＊	＊	＊	口径25	大きく水平近く外反する口縁部で、端部は外に開をもつ。	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	淡茶色	雲母微粒子若干含	1／7		007－05
45	＊	＊	＊	＊	口径48.8 器高18.1	平な底部から丸味をもって立ち上がる体部から短かく外方へ開く口縁部をもつ。	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	＊	2mmの砂粒 雲母片含	1／10		008－02
46	＊	Q－5 SB4	＊	壺	—	基部の太い宝珠つまみの蓋形	つまみ側面指押え、他はナデ	明赤茶色	1mmの微砂若干含	つまみ完存		007－03
47	＊	P－5 SB4	須恵器	＊	口径11.3 器高 2.8	えみをもつ天井部で、内面のかえりは口縁端部より短かい。	天井部外面の½をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰褐色	砂粒含	完形		002－01
48	＊	P－5 SB4 焼土	土師器	高杯	口径15	丸味をもつ杯部で口縁端部は細くなっておわる。	杯部外面ハケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	暗茶色	2mmの砂粒若干含、雲母片多含	脚部欠損杯部は完存	内面にタール状物質付着 粗製	007－04
49	SH29	P－5 SB3	＊	杯	口径15 器高 2.7	平らな底部から屈曲して若干外反ぎみに立ち上がる口縁部で、端部はそのままえ丸っておさめる。	底部外面ヘラケズリ、口縁部強くて段にヨコナデ	明赤色	雲母微粒子含	1／8		005－01
50	＊	＊	＊	皿	口径22 器高 2.8	平らな底部から内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内に肥厚する。	底部外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	淡赤茶色	雲母微粒子含	＊		005－02
51	＊	＊	＊	甕	—	丸底の底部をもつ	外面ハケメ、体部内面ナデ、底部内面ヘラケズリ	淡赤色	雲母片若干含	1／3	体部外面にヘラ記号	006－03
52	＊	＊	＊	＊	口径19.8	体部から大きく外反する口縁部で、端部は若干受け口状を呈する。	体部外面ハケメ、内面ヘラケズリか、口縁部ヨコナデ	茶色	1mmの砂粒多含	1／8		006－01
53	＊	＊	＊	＊	口径22	体部から短かく外反する口縁部で、端部は外に面をもち、つまみ上げる	体部外面ハケメ、内面上半ハケメ、下半ヘラケズリ	白茶色	3mmの砂粒含	1／2		005－03
54	＊	P－6 SB3 焼土中	＊	＊	口径25.2	長胴の体部から屈曲して外方へ開く口縁部で、端部は外に面をもち、つまみ上げる。	外面ハケメ、内面板状工具によるナデ、浅いハケメととることもできる。口縁部ヨコナデ。	暗茶色	3mmの砂粒若干含	口縁部小片体部½	外面煤付着	006－02
55	＊	P－5 SB3	＊	瓶	口径27.3	体部からそのまま直立する口縁部で、端部は内傾する面をもつ。	体部外面ハケメ、内面上半若干ハケメが残る。下半はヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	赤茶色	雲母片若干含	1／8		008－01
56	＊	＊	鉄製品	釣針	径 0.2 長 3.5	無銘の平式的針で、ちもとはそのままおわる。	—	—	—	完形	錆が多く形態不明確	003－03
57	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	—	＊	＊	003－04
58	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	—	＊	＊	003－05
59	＊	＊	＊	＊	＊	＊	—	—	—	＊	＊	003－06
60	＊	＊	＊	鉄鏃	長 9.8 最大幅 3	平茎で正三角形状を呈し、有茎である。	—	—	—	＊	＊	003－07

表6　遺物観察表 (3)

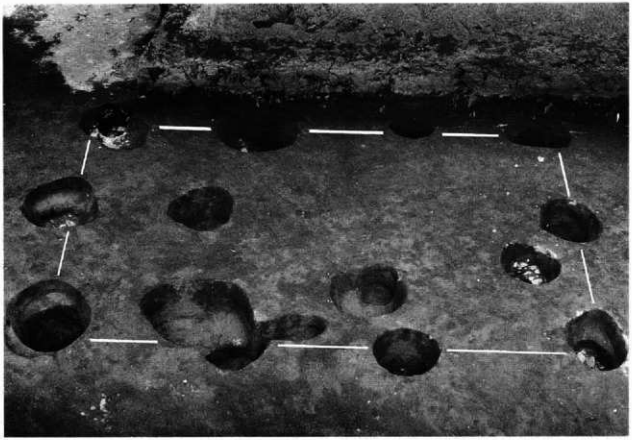
番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
61	SD34	N－2 SD4	青磁	椀	口径16	口縁端部は外に若干肥厚し、やや外傾する。	ロクロナデ	淡緑黄色(釉色)	精良	小片	外面に逆外文	004－04
62	+	N－2 石組中	山茶椀	+	高台径8.7	低く幅の広い高台を張り付ける。	底部外面ナデ、他はロクロナデ	茶灰色	1mの砂粒若干含	底部欠損	高台接地面に刷毛痕	004－05
63	+	+	紙恵器	甕	—	外反する口縁部で、端部は外に面をもつ。	ロクロナデ	黄灰色	4mの小石多含	小片	外面に波状文と沈線、他成不良	004－03
64	SK22	R－3 SK1No.2	土師器	皿	口径7.4 器高1.1	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は尖り気みにおわる。	内面ナデ、外面未調整	茶白色	砂粒を若干含む	完形		002－03
65	+	R－3 SK1No.1	+	+	口径7.4 器高0.8	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。	+	淡黄茶色	精良	+		002－04
66	包	K－3 包	縄文土器	深鉢	—	口縁端部外面に隆帯を張り付ける。	内面ナデ、外面沈線文を施す	暗赤茶色	2mの砂粒多含	小片		011－05
67	+	K－1 包	+	+	—	波状口縁を呈する。	内面ナデ、外面沈線と擦消縄文を施す。	淡茶色	2mの砂粒若干含	+		011－04
68	SH29	P－5 SB3	+	+	—	口縁端部は内に肥厚する。	内面ナデ、外面沈線と刺突文を施す。	淡赤茶色	1mの砂粒多含	小片	混入	005－04
69	—	L－7 P2	+	+	—	—	+	茶色	+	+		005－05
70	包	R－1 包	土師器	杯	口径15 器高2.8	平な底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は大きく外反する。	底部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明赤色	精良	1／4		010－04
71	+	R－5 包	+	+	口径13.2 器高3.2	平な底部から緩曲して外反気みに立ち上がる口縁部で、端部は内弯する。	底部内外面ナデか、口縁部ヨコナデ	明黄赤色	1mは下の微砂含	口は完形	磨滅のため調整不明確	009－01
72	+	R－4 包	+	+	口径12.1 器高2.5	+	底部外面簡単なナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	+	1m以下の微砂若干含	1／2		010－02
73	+	+	+	+	口径13 器高2.8	平な底部から緩曲して外反気みに立ち上がる口縁部で、端部は内弯し、外に沈線を巡らす。	底部外面未調整か。内面ナデ、口縁部ヨコナデ。	+	精良	1／4	磨滅のため調整不明確	010－03
74	+	R－2 包	+	皿	口径7.5 器高1.2	底部から若干立ち上がる口縁部をもつ浅い小皿	内面ナデ、外面未調整	淡黄茶色	2mの砂粒含	完形		010－05
75	+	+	+	+	口径7.7 器高1.1	+	+	淡茶色	雲母片若干含	+	外面に格子状痕有	010－06
76	+	+	+	+	口径7.5 器高0.8	+	+	黄茶色	2mの砂粒若干含	口縁部若干欠損		010－07
77	+	R－4 包	+	鍋	口径38	外反する口縁部で端部は内に巻き込む。	外面ハケメ、内面ヨコナデ	淡茶色	雲母片若干含	1／8	外面煤付着	010－01
78	+	H－1 包	ロクロ土師器	椀	口径15 器高3.8	平な底部から内弯気みに立ち上がる口縁部をもつ。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡赤色～黄茶色	3mの砂粒含	1／4	底部外面糸切り痕	010－08
79	+	O－5 包	須恵器	壺	口径15	平らな天井部で、若く短直する口縁部をもつ。	天井部外面ロクロケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	緑灰色	2mの砂粒含	+	ロクロも回転	011－04
80	+	K－4 包	青磁	椀	高台径6	厚い底部で、削り出し高台である。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	黄緑色(釉色)白茶色(地)	精良	+	全面施釉	009－07
81	+	C－2 包	山茶椀	+	高台径7.7	比較的高い角形高台を張り付ける。	内外面ロクロナデ	白茶色	1mの砂粒若干含	1／2	内面に自然釉が若干かかる。	009－05
82	+	F－2 包	+	+	高台径7	低い角形高台を張りつける。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡灰色	1mは下の微砂若干含	底部完存	内面に自然釉がかかる。穿孔に痕	009－02
83	+	N－4 包	+	+	高台径7.3	+	+	淡茶色	3mの砂粒若干含	1／3	内面に自然釉がかかる。	009－04
84	+	R－4 包	+	+	底径7.3	高台は付けられていない。	底部外面未調整、他はロクロナデ	淡黄茶色	1mの砂粒雲母若干含	1／2		009－06
85	+	N－3	+	鉢付鉢	底径17.5	平な底部に脚かい脚が3～4ヶ所に付く。	脚は手づくね、底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	淡灰茶色	5mの砂粒若干含	1／4		009－03
86	+	P－2 包	瓦	丸瓦	—	—	外面ヘラケズリか。内面布目や、布の縫り目が残る。	白茶色	3mの砂粒多含	小片	焼成不良	012－03
87	+	F－2 包	+	+	—	—	外面ヘラケズリ、内面模骨痕や布目痕が残る。	暗茶色	2mの砂粒多含	+		012－01
88	+	N－3 包	+	+	—	行基瓦と考えられる。	外面ヘラケズリか。内面瓦部ヘラケズリ、他は布目が残る	灰色～赤茶色	3mの砂粒若干含	1／6		012－02

表7　遺物観察表（4）

A地区全景　（西から）

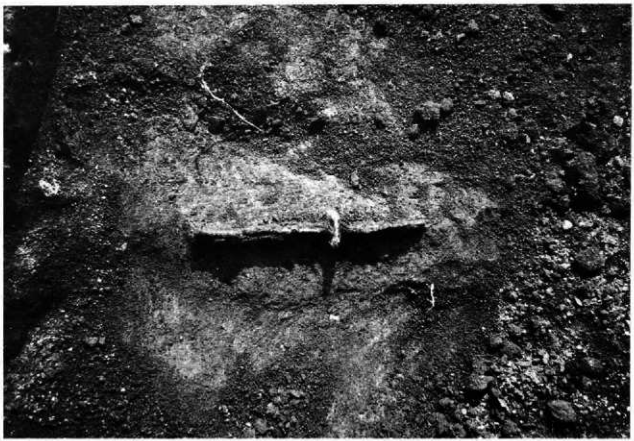
ＳＢ１　（北から）

SH2　（東から）



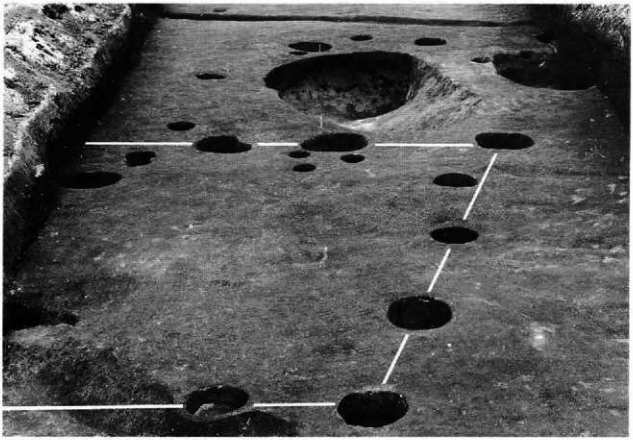
SB6　（南から）

F地区全景　（西から）



紡錘車出土状況　（北から）

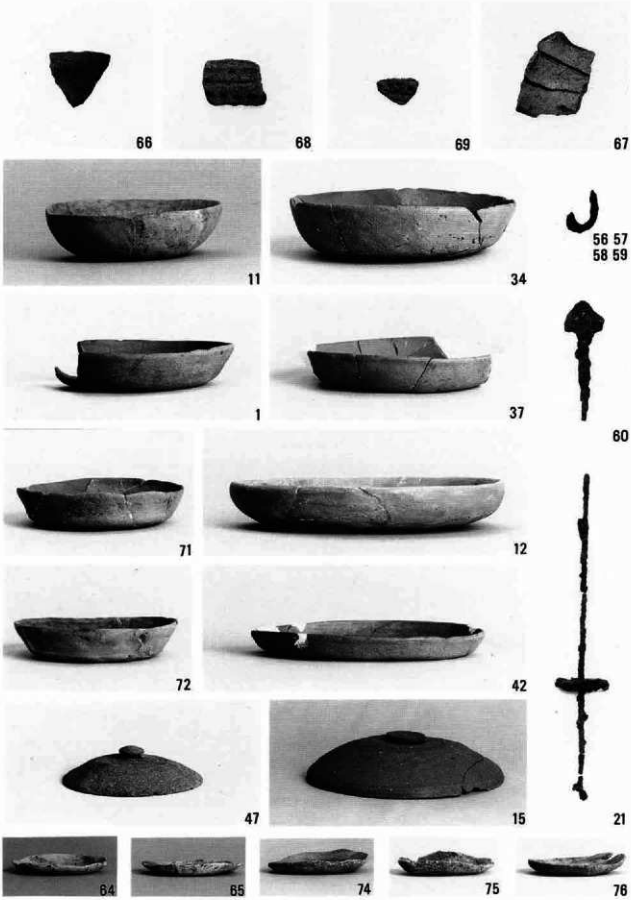
ＳＢ12（西から）



ＳＢ14（西から）

G地区全景　(北から)

ＳＨ24、ＳＨ25、ＳＨ27、ＳＨ29　(北から)



出土遺物 （1：3）

V. 多気郡明和町　明星（みょうじょう）地区内遺跡群

1．はじめに

県営ほ場整備事業（明星地区）にかかる埋蔵文化財発掘調査の対象となった、多気郡明和町大字明星地区に位置する水池遺跡と黒土遺跡を「明星地区内遺跡群」として報告を行う。

調査の方法　調査地は、Ⅰ区が雑木林、Ⅱ・Ⅲ区が植林地であった。直線的な排水路を中心とした調査区のため、地区割りはⅠ～Ⅲ区を通して行い、4mの枡目を切った（第38図）。Ⅰ区北端からⅢ区南端までの距離はおよそ146mである。包含層や遺構に伴わない遺物は、南北のアルファベットラインと東西の数字ラインの交点が北西隅となる方眼をその小地区として取り上げている（例N42、P45など）。

なお、第1次調査（試掘）により、表土から遺構検出面までの深さは浅いと判断されたため、掘削は全て人力で行った。

2．調査区の位置と周辺の環境

調査区は明星集落の南側、水田地に接する標高約10mの植林地および雑木林に相当している（第34図）。調査区の東側には土師器焼成坑で著名な国指定史跡「水池土器製作遺跡」の指定地がある。[1] 南部は黒土遺跡で、同様な土師器の焼成坑が明和町教育委員会の調査により検出されている。[2] このように今回の調査区周辺には土師器生産に関係した遺跡がかなり濃密に分布していることを想定させる。

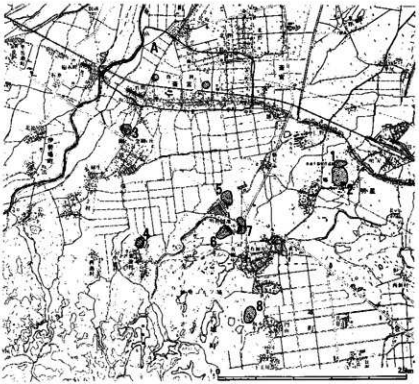
この土師器焼成坑は、近接する斎宮跡（国史跡）の時期とほぼ重なるため、それとの深い関連が想定される。また、戦後しばらくまで付近の蓑村地区などでは神宮に奉納するための土師器が数戸で生産されていたといい、今でも「神宮土器調整所」として往時が偲ばれる。全国でも稀な土師器焼成坑の密集地帯であり、今後は古代～現代に至る土師器生産の実態究明が急務である。

3．調査の成果――層位と遺構――

今回の調査区は、Ⅰ～Ⅲ区に分かれている。小字では全て「水池」に相当するが、周知の埋蔵文化財包蔵地としてはⅠ・Ⅱ区が水池遺跡に、Ⅲ区が黒土遺跡に、それぞれ相当する。しかし、当報文中では便宜上2遺跡を分けずに記述していく。

（1）基本層序（第36図）

各調査区において現表土の下に客土層が認められる。この客土層は東側ほど薄くなっており、Ⅲ区で



第34図　遺跡位置図　（Scale ＝1／50,000）（国土地理院発行1／25,000『松阪』）
1．水池遺跡　2．黒土遺跡　3．金剛坂遺跡　4．戸塚遺跡　5．堀田遺跡　6．発シB遺跡　7．発シA遺跡　8．砂谷遺跡　A．倉宮跡
※遺跡は土器焼成坑検出遺跡に限る。

は東端で消滅している。

遺構基盤層は明赤褐色系の粘質土である。この層は客土層の無いⅢ区東端で現地表面から約0.3mで検出できる。遺構基盤層の下には黄色系粘土層があり、この層が地山に相当すると考えられる。

Ⅲ区の中央南壁土層に見られるように、遺構基盤層の明赤褐色系土層は、現地形と比べて西への傾斜がかなりなだらかなことが判る。これは客土層の形成と密接に関係すると思われ、後に検討する。

（2）Ⅰ区の調査

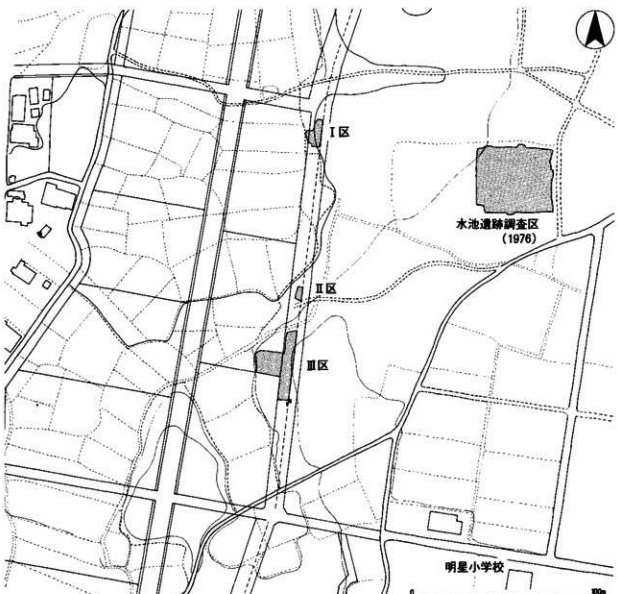
Ⅰ区は、国指定史跡「水池土器製作遺跡」指定地の西約80mに位置する（第35図）。調査区の層位（第36図Ⅰ区）は、現表土の下に旧表土があり、その間に客土層の堆積が認められた。遺構検出は明赤褐色土層上で行った。

検出した遺構にはピット・溝・不定形土坑がある。ピットは建物としてまとまらない。溝は浅く、不明瞭な落ち込み状を呈しているものである。

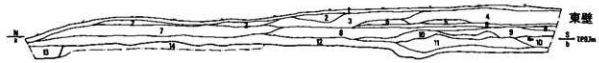
出土遺物は極めて少量である。ピット7からは奈良時代頃と考えられる土師器甕（第44図61）が出土した。その他、黄色混礫土層（第36図Ⅰ区11層）から陶器鉢（第41図62）、客土中からサヌカイト片が出土している。

（3）Ⅱ区の調査

Ⅱ区はⅢ区の北に隣接している。調査区の層位（第36図Ⅱ区）は、暗赤褐色土層の上に客土が堆積す



第35図　調査区位置図　(Scale ＝1／2,000)

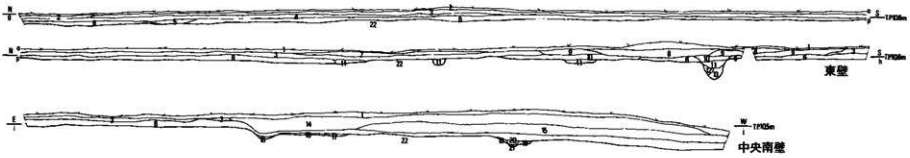


Ⅰ区

1．淡茶灰色土（表土）
2．淡黄色混礫土
3．暗褐色礫
4．白灰色礫
5．黄褐色砂
6．黒褐色土（旧表土）
7．灰黄褐色土
8．褐色砂質土、礫多い
9．黒褐色砂質土
10．暗褐色土
11．黄色混礫土
12．暗赤褐色粘質土
13．暗灰褐色土
14．明赤褐色土（基盤層）

Ⅱ区

1．暗灰色土（表土）
2．赤褐色混礫土
3．明黄褐色混礫土
4．暗褐色土
5．暗褐色混礫土
6．明黄褐色土
7．淡褐色土
8．明赤灰色土
9．淡赤灰色土
10．明褐色粘質土、土器含む
11．明赤褐色粘質土
12．明黄褐色砂質土
13．暗赤褐色土
14．明赤褐色土（基盤層）



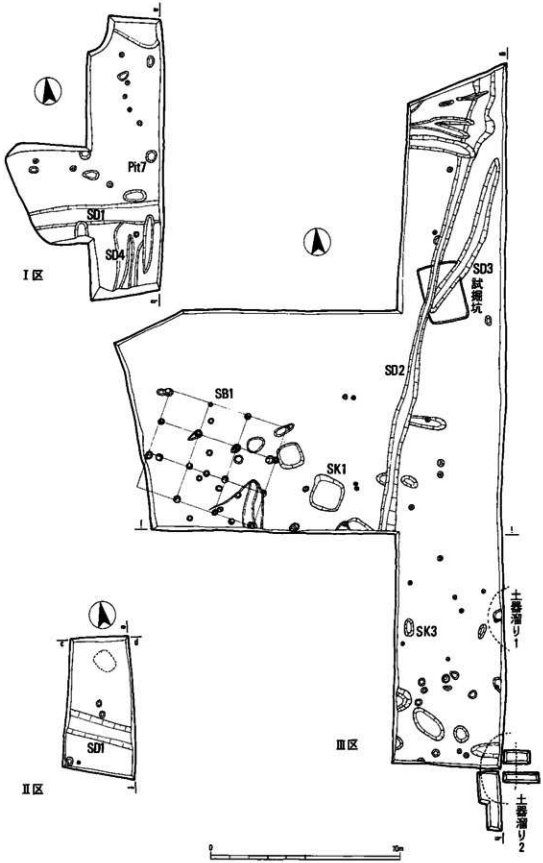
Ⅲ区

1．黒褐色土（表土）
2．暗茶灰色土
3．黄味淡赤褐色土
4．濃褐色土
5．暗赤褐色土、土器片含む
6．赤褐色土
7．淡褐色土、赤色粒まじり
8．明褐色土
9．赤褐色粘質土、土器多量
10．暗赤褐色土、土器多量
11．暗赤褐色土
12．暗褐色土
13．暗黄赤色土
14．赤黄色混礫土
15．淡灰褐色砂質土（旧表土？）
16．淡黄灰色土
17．暗赤褐色土
18．灰褐色土
19．淡赤褐色土
20．黄色まじり赤褐色土
21．淡黄褐色土
22．明赤褐色土（基盤層）

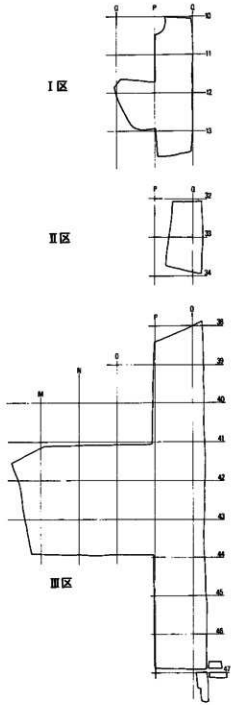
※ 土器溜りは9・10層

0　5m

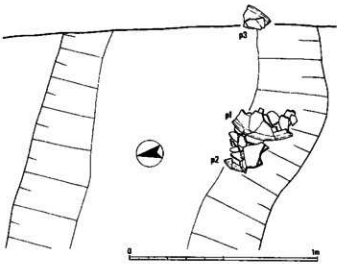
第36図　調査区土層断面図（Scale ＝ 1／100）



第37図　調査区平面図　(Scale ＝1／200)



第38図　調査区地区割り図　(Scale ＝1／400)



第39図　Ⅱ区ＳＤ１土器出土状況図　(Scale ＝1／20)

るものである。客土層は東側から西側へとゆるやかに傾斜しながら堆積している。遺構基盤層は明赤褐色系土層である。

遺構は溝の他、ピット・落ち込みが検出された。

溝ＳＤ１は東西方向に走るものである。遺構埋土は基本的に客土層の一部と同質のものである。遺構検出面上の客土層も含めた堆積状況を観察すると、客土層の形成時にこの溝も埋められた可能性が高いと考えられる。溝ＳＤ１からは土師器の焙烙が折り重なって２個体分出土した（第39図）。溝ＳＤ１付近からは陶器擂鉢（第44図55）も認められ、客土層の形成と溝の埋没時期を示すものと考えられる。

（４）Ⅲ区の調査

Ⅲ区は今回の調査区の南端に位置し、最も面積が広い。層序は、東壁に見られる状態が基本と考えられ、遺構基盤層である明赤褐色土上に表土を含めて３～４層の薄い堆積土が認められる。しかし、調査区中央に設定した東西方向の土層（中央南壁）では、遺構検出面までの深さが西へ行くほど深いことが判る。これはⅠ・Ⅱ区に認められたのと同様な客土層によるものであり、調査区中央を南北方向に走る溝ＳＤ２が境界となっている状況が観察される。

検出した遺構には掘立柱建物・溝・焼土を伴う土坑・ピットなどがある。また、遺構とは別に扱うべきかも知れないが、遺構検出面から１層上に、土器を多量に含んだ層（「土器溜まり」と仮称する）が２か所認められた。

掘立柱建物ＳＢ１（第41図）は調査区内で３間×３間分を検出した。しかし、南側あるいは西側に若干広がる可能性も大きい。桁行を東西方向、梁間を南北方向として記述していく。

柱間は、30.3cmを１尺として換算すると、桁行が７尺（約2.2ｍ）、梁間が６尺（約1.8ｍ）のそれぞれ等間の総柱である。柱掘形は0.4ｍ～0.2ｍである。柱痕跡は、確認できたもので直径0.15ｍ前後である。

ピット内に根石をもつものはない。また、掘形の深さは、断面図に見るように一定していない。M42pit 9とM43pit 9の柱痕跡内には土師器鍋がそれぞれ数固体分投棄されていた。

土坑ＳＫ１は、掘立柱建物ＳＢ１の東側に位置する方形の土坑である。その機能については後考する。

土坑ＳＫ３（第42図）は楕円形を呈する浅いものである。埋土は、最下層が熱によって還元されたものと考えられる灰褐色土で、その上に焼土や木炭が含まれる層が認められた。土坑そのものが熱変しているのではない。上層の暗褐色土層を中心に、土師器甕６点、皿２点、小皿１点、陶器椀（山茶椀）１点が一括投棄と思われる状態で出土した。甕は煤が付着したものである。

土坑ＳＫ３のような焼土層が認められる遺構に類似したものとして、土坑ＳＫ４がある。この土坑から遺物は出土しなかったが、窯壁の一部かと思われる焼土塊が出土した。

溝ＳＤ２は、調査区を南北方向に走るもので、その南北端は調査区外に伸びている。断面形状は基本的に逆台形を呈するものであるが、北端では皿状を呈する。遺物はほとんど含まず、時期の決定は難しい。しかし、先述の客土層がこの溝を境に西側へ認められることから、客土層形成以前の何らかの区画を表したものかも知れない。ＳＤ２を境に東側より西側の方が１段低いことも区画溝であることを示すものかと考える。

土器溜まりは、調査区の南端に２か所認められた。表土直下において認められるものであり、陶器・土師器の破片を多量に含んでいる。土師器のうち甕は使用時に付着したと見られる煤が付着しているものが多くあり、土器焼成坑に付随する「物原」のようなものとは想定し難い。

なお、Ⅲ区の南に接して古墳状に隆起した地形が認められた（第40図）。トレンチを設定して掘削したところ、各所に認められたのと同質の客土層が認められ、その中から近世以降と考えられる瓦片が出土した。したがってこの隆起地形についても、客土層の形成と何らかの関係があるものと判断した。

４．調査の成果 ―出土遺物―（第43～44図）

今回の調査で出土した遺物はコンテナ箱に約20箱であり、そのほとんどが土器類である。

出土土器は大別して４時期に分けられる。弥生時代以前・奈良時代・平安時代末～鎌倉時代前半・江戸時代以降である。遺物の詳細は観察表を参照していただくこととし、ここではその概要を記す。

弥生時代以前のものはⅠ区から出土したサヌカイト片のみであるが、その正確な時期は不明である。

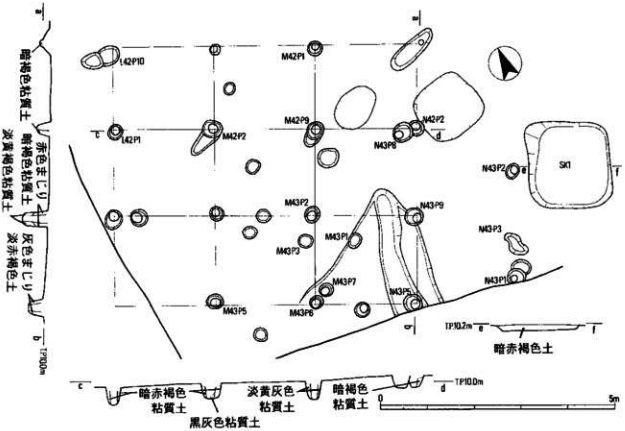
奈良時代に該当するものは土師器甕（61）の他、須恵器平瓶（54）がある。

平安時代末～鎌倉時代前半のものが当調査によって出土した遺物の大部分を占める。新田洋氏による分類[2]（以下、新田分類）を基準としたが、新田分類の１～４類については当報告では「甕」とする。平安時代末としたものは新田分類の３～４類に相当するもので、Ⅲ区ＳＫ３、土器溜まり１・２出土の遺物が概略相当する。鎌倉時代前半としたものは新田分類の５類に相当するもので、Ⅲ区ＳＢ１柱痕跡内出土土器がそれにあたる。

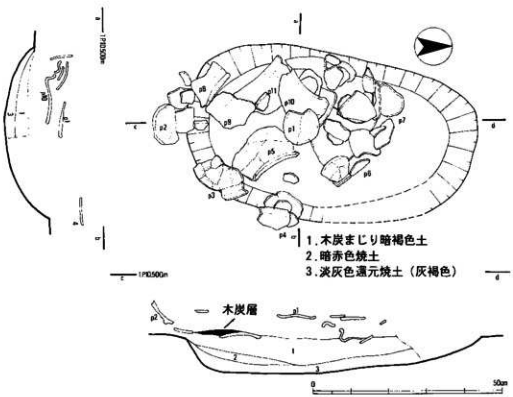
江戸時代以降としたものは、厳密な時期比定は今後の課題であるが、Ⅱ区ＳＤ１・Ⅰ区客土層出土の土器が相当する。陶器擂鉢（62）は瀬戸産と考えられ、藤澤良祐氏の編年[3]による瀬戸本業焼第９～10小期、19世紀前半頃に比定できるようである。

その他、土製支脚が３点出土している。51・52は新田分類の３～４類に、19は５類に、それぞれ併行

第40図　Ⅲ区南の隆起地形　（Scale ＝１／400）



第41図　Ⅲ区ＳＢ１およびＳＫ１平面・土層断面図　(Scale ＝１／80)



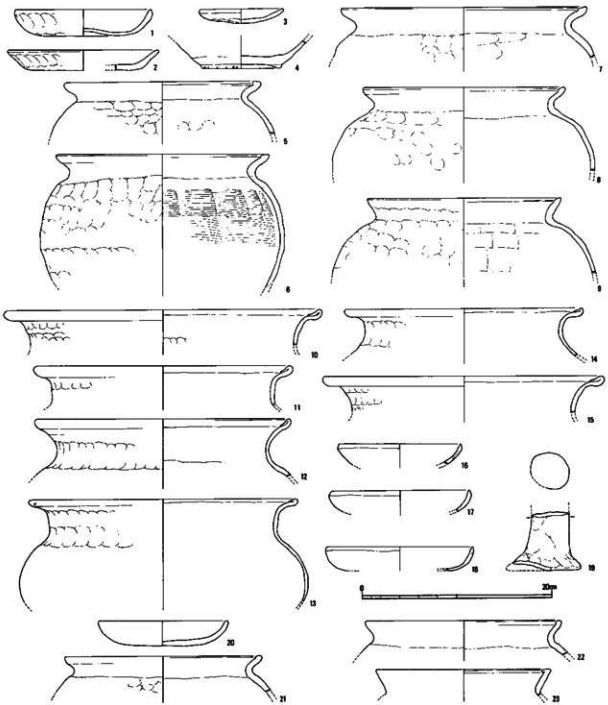
第42図　Ⅲ区土坑ＳＫ３　平面・土層断面図　(Scale ＝１／20)

するものと考えられる。

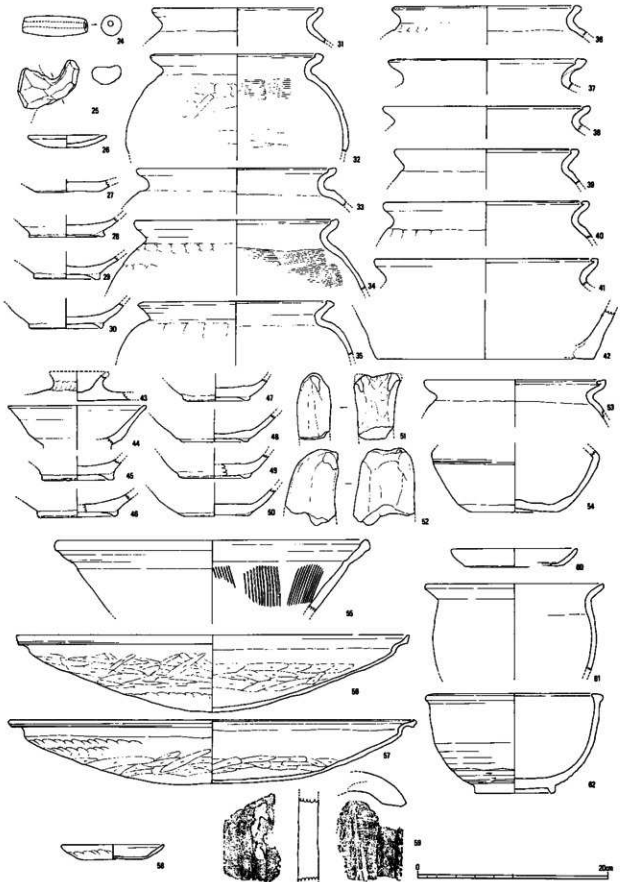
5．調査のまとめと検討

調査区は排水路部分を中心とした線的なものであった。そのためⅢ区に認められた掘立柱建物の群としての広がりの有無やⅢ区土器溜まりの性格など、明らかにし難い点も多くある。それでもいくつかの点で興味深い結果を得ることとなった。今回の調査で得られた問題点をまとめておきたい。

土坑ＳＫ３の機能　今回の調査では土器焼成坑などの直接土器製作遺構に関わるものは確認できなかった。また調査区全体の遺構・遺物密度も低い。これは、水池・黒土両遺跡における土器製作遺構群の西限を示すものとして把握される。ただし、Ⅲ区土坑ＳＫ３・４では激元された焼土層や焼土塊が認められたことから、Ⅲ区の東隣に土器焼成坑が存在する



第43図　土坑ＳＫ３、掘立柱建物ＳＢ１他出土土器　(Scale ＝1／4)



第44図　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区各遺構他　出土土器　（Scale ＝１／４）

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土時	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
1	土師器 皿	Ⅲ P45	SK3P6	(口) 14.8 (高) 2.8	外：ナデ、指オサエ 内：ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	良好	淡褐色	口縁 1／5		3
2	〃 〃	〃 〃	〃 P6	(口) 16.2 (高) 2.1	外：ナデ、指オサエ 内：ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	〃	〃	〃		4
3	〃 小皿	〃 〃	〃 P1	(口) 8.9 (高) 1.7	外：指オサエ、ナデ 内：ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	やや軟	明褐色	4／5		2
4	陶器 椀	〃 〃	〃 P2	(高台)8.6	外：ロクロナデ、高台：ナデ 内：ロクロナデ	密 0.5～3.0cm の小石	堅緻	淡灰色	高台 3／5	山茶椀 高台はモミガラ痕	5
5	土師器 甕	〃 〃	〃 P9	(口) 21.0	外：ナデ、オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	良好	淡茶灰色	口縁 1／5	外面にススス？	9
6	〃 〃	〃 〃	〃 P3、7、10	(口) 22.7	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：ナデ、ハケメのちヨコナデ	粗 0.5～3.0cm の小石	やや軟	褐～淡褐色	口縁 3／5		7
7	〃 〃	〃 〃	〃 P10	(口) 26.1	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	良好	淡茶灰色	口縁 1／8		8
8	〃 〃	〃 〃	〃 P5	(口) 21.4	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 0.5～1.0cm の小石	やや軟	淡黄褐色	口縁 1／4		6
9	〃 〃	〃 〃	〃 P10 東下層	(口) 20.6	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		淡褐色	口縁 3／5		1
10	〃 鍋	〃 N43	Pit 9 (SB1)	(口) 34.0	外：指オサエのちヨコナデ 内：指オサエのちヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	良好	〃	口縁 1／3	柱根跡内から出土	10
11	〃 〃	〃 〃	〃	(口) 27.4	外：指オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	やや軟	〃	〃		37
12	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(口) 27.4	外：ナデ、オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	〃	〃	口縁 2／5		11
13	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(口) 28.5	外：ナデ、オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	〃	〃	口縁 1／5		36
14	〃 〃	〃 N42	Pit 9 〃	(口) 25.2	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	〃	〃	口縁 1／10		43
15	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(口) 29.5	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～1.0cm の小石	良好	淡茶灰色	〃		42
16	〃 皿	〃 〃	〃 〃	(口) 13.2	外：ハケリ 内：ナデ	密 0.5～1.0cm の小石	やや軟	淡黄灰色	口縁 1／8		62
17	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(口) 15.1	外：ハケリ 内：ナデ	粗 0.5～1.0cm の小石	〃	淡茶灰色	口縁 1／5		63
18	〃 〃	〃 N42	Pit 2 〃	(口) 15.8	ハケリのため不明	密 0.5～2.0cm の小石	良好	淡褐色	口縁 1／5		46
19	土製支脚	〃 M45	Pit 6 〃	(脚柱) 3.6	外：オサエ、ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		淡赤灰～淡灰褐	下部 3／4	焼により一部変	47
20	土師器 皿	〃 P44	黄味淡赤褐色土	(口) 13.9 (高) 2.6	ハケリのため不明	粗 0.5～3.0cm の小石	やや軟	淡褐色	口縁 1／3		35
21	〃 甕	〃 N43	Pit 1	(口) 20.8	外：ナデ、オサエのちヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～3.0cm の小石	〃	〃	口縁 1／5		39
22	〃 〃	〃 O43	SK1	(口) 20.5	ハケリのため不明	密 0.5～1.0cm の小石	〃	茶灰色	口縁 1／8		41
23	〃 〃	〃 〃	〃 〃 A	(口) 18.4	ハケリのため不明	粗 0.5～2.0cm の小石	軟	淡褐色	〃	外面にススス	40
24	土錘	〃 Q46	土器溜り（南）	(長) 7.0 (径) 2.2 (孔径) 0.65	ナデ、オサエ	粗 0.5～2.0cm の小石	やや軟	淡茶灰色	完形	黒斑あり	51
25	土師器 把手付？	〃 Q47	〃 〃		外：ナデ、オサエ 内：ナデ	粗 0.5～3.0cm の小石	〃	淡黄灰色	把手 90%	飯か？	38
26	〃 小皿	〃 Q47	〃 〃	(口) 8.3 (高) 1.3	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗 0.5～1.0cm の小石	良好	〃	口縁 1／4	黒斑あり	26
27	〃 椀	〃 〃	〃 〃	(底) 7.2	外：ロクロナデ、糸切り 内：ロクロナデ	粗 0.5～1.0cm の小石	やや軟	淡褐色	底部 完存	ロクロ土師器	16
28	陶器 〃	〃 〃	〃 〃	(高台) 8.1	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	堅緻	淡灰色	底部 3／5	山茶椀 高台はモミガラ痕	25
29	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(高台)7.1	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	密 0.5～1.0cm の小石	〃	淡茶灰色	底部 完存	山茶椀	24
30	〃 〃	〃 〃	〃 〃	(高台) 7.8	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～2.0cm の小石	〃	〃	底部 2／3	山茶椀	17
31	土師器 甕	〃 〃	〃 〃	(口) 18.0	ハケリのため不明	粗 0.5～2.0cm の小石	軟	淡黄灰色	口縁 1／3		29

表8　遺物観察表（1）

No.	器種		地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	時	硬成	色調	残存度	備考	実測 No.
32	土師器	甕	B Q47	土師溜り（南）	(口) 18.3	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：ハケメ、板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～3.0mm の小石		良好	淡灰褐色	口縁 1／5		21
33	＊	＊	＊ ＊	＊ ＊	(口) 21.2	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～5.0mm の小石		＊	黄褐色	口縁 1／6		31
34	＊	＊	＊ ＊	＊ ＊	(口) 21.6	外：オサエ、ナデのちヨコナデ 内：ハケメ、ヨコナデ	粗 0.5～3.0mm の小石		＊	明～淡褐色	口縁 1／5		22
35	＊	＊	＊ Q46	＊ ＊	(口) 20.8	外：ナデ、オサエのちヨコナデ 内：ナデ（？）、ヨコナデ	粗 0.5～3.0mm の小石		軟	明褐色	口縁 1／3		33
36	＊	＊	＊ Q47	＊ ＊	(口) 19.9	外：板ナデ、ヨコナデ 内：板ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		やや軟	黄褐色	口縁 1／10		27
37	＊	＊	＊ ＊	＊ ＊	(口) 20.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～3.0cm の小石、黒色小粒		良好	淡褐色	＊		23
38	＊	＊	＊ ＊	＊ ＊	(口) 22.0	ハケリのため不明	粗 0.5～2.0cm の小石		やや軟	＊	口縁 1／5		20
39	＊	＊	＊ ＊	＊ ＊	(口) 19.4	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石、黒色小粒		良好	＊	口縁 1／10		30
40	＊	＊	＊ Q46	＊ ＊	(口) 21.7	外：オサエ、ハケメのちヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	粗 0.5～1.0cm の小石		＊	淡灰褐色	口縁 1／5		32
41	＊	＊	＊ Q47	＊ ＊	(口) 23.7	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～1.0cm の小石		＊	＊	口縁 1／10		19
42	陶器	壺	＊ ＊	＊ ＊	(底) 22.9	外：ナデ 内：ヨコナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		堅緻	淡灰色	底部 1／10		18
43	土師器	壺	＊ N43	第2層	(脚柱) 5.2	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		良好	淡褐色	脚部 完存		45
44	陶器	鉢	＊ P46	＊	(口) 14.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 0.5～1.0cm の小石		堅緻	淡灰色	口縁 1／8	山茶鉢	56
45	＊	＊	＊ M43	＊	(高台) 7.6	外：ナデ、ロクロナデ ハリツケ高台 内：ロクロナデ	密 0.5～1.0cm の小石		＊	＊	高台 4／5	山茶鉢 高台にモミガラ痕	57
46	＊	＊	＊ ＊	＊	(高台) 7.4	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		やや軟	淡茶灰色	高台 2／5	高台にモミガラ痕	55
47	＊	＊	＊ P46	＊	(高台) 7.1	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～3.0cm の小石		堅緻	淡灰色	底部 完存	山茶鉢	54
48	＊	＊	＊ Q44	＊	(高台) 7.1	外：ロクロナデ、ハリツケ高台 ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		＊	＊	底部 3／5	＊	53
49	＊	＊	＊ ＊	＊	(高台) 7.6	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～3.0cm の小石		＊	＊	底部 1／3	＊	59
50	＊	＊	＊ M43	＊	(高台) 7.3	外：ロクロナデ、糸切り ハリツケ高台、ナデ 内：ロクロナデ	密 0.5～1.0cm の小石		＊	＊	底部 完存	＊ 高台にモミガラ痕	58
51	土製文鎮		＊ M40	＊	(脚柱) 3.8	外：オサエ、ナデ	粗 0.5～2.0cm の小石		軟	淡赤灰～淡茶灰色	上部 4／5	被熱で赤変 崩れ易い	52
52	＊		＊ O41	表土		外：オサエ、ナデ	粗 0.5～3.0cm の小石		やや軟	淡赤灰～淡茶灰色	上部 80%	＊	48
53	土師器	甕	＊ N43	第2層	(口) 19.0	ハケリのため不明	粗 0.5～2.0cm の小石		軟	淡黄灰色	口縁 1／5		44
54	須恵器	平瓶	＊ P44	＊	(体) 17.8 (底) 9.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密 0.5～2.0cm の小石		堅緻	暗灰色	体下部 3／5	内面に自然釉がおちる	50
55	陶器	灯明	S Q33	客土層	(口) 33.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデのちハケメ	粗 0.5～1.0cm の小石		＊	釉：褐色 器：茶灰色	口縁 1／5	瀬戸焼後　全面に鉄釉がかかる	60
56	土師器	焙烙	＊ ＊	S D 1 P 2 ・ 3	(口) 41.8 (高) 8.1	外：ナデ、ヨコナデのちケズリ 内：ナデ、ヨコナデのちケズリ	粗 0.5～2.0cm の小石		良好	明褐色	4／5		13
57	＊	＊	＊	＊ P 1 ＊	(口) 43.4 (高) 6.8	外：ナデ、ヨコナデのちケズリ 内：ナデ、ヨコナデのちケズリ	密 0.5～1.0cm の小石		＊	明褐色	4／5	外部にススが付着	12
58	＊	皿	＊ ＊	＊	(口) 11.0 (高) 1.6	外：オサエ、ナデ 内：ナデ	密 0.5～1.0cm の小石		＊	淡褐色	1／4		14
59	平瓦		＊	＊ ＊		凸面：ナデ 凹面：ナデ、縄骨痕	粗 0.5～3.0cm の小石		＊	暗灰色 （断）淡色		端面カット	15
60	土師器	皿	I P12	S D 4	(口) 13.4 (高) 1.9	外：ナデ、ヨコナデ 内：ヨコナデ	密 0.5～1.0cm の小石		＊	外：暗褐色 内：明褐色	1／4		38
61	＊	甕	I P11	Pit 7	(口) 18.9	ハケリのため不明	粗 0.5～2.0cm の小石		軟	淡茶灰色	縁 1／5		49
62	陶器	鉢	I P12	S D 1 上 黄色皮膚上層	(口) 18.9 (高台) 8.5 (高) 10.5	外：ロクロケズリ、高台ケズリ 出し、ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗 0.5～3.0cm の小石		堅緻	（釉）淡緑灰色 （器）茶灰色	口縁 1／5 高台完存	瀬戸、美濃 釉は高台寄く全面内面にトチン痕4ヶ所	34

表9　遺物観察表（2）

可能性は高い。

注目されるのは、この周辺域で多数確認されている土器製作に関連する遺構・遺物が飛鳥時代から平安時代前半までの間のものであるのに対し、ＳＫ３は出土土器から平安時代末頃に比定できることである。平安時代末頃の土器焼成坑は未だ確認されていないが、この資料により、当地における土器製作が少なくとも平安時代末頃までは継続して存在していたことが考古学的に推測される。土器型式からは平安時代末頃の土器に前代との断絶は見出し難く、スムーズな変化をたどっている。このことから、古代以来、同一系譜上にある製作者集団（工人）が中世初頭頃まで存在していたと考えて大過なかろう。

しかし、ＳＫ３からは直接土器焼成坑の形態が推量できない。この遺構の確認により、何らかの土器焼成遺構が平安時代末頃に存在していたのは確認できるが、これまでに確認されたような形態とは異なった土器焼成遺構がこの頃成立している可能性も充分あり得よう。

建物外土坑について　３間×３間分が確認されたＳＢ１の東にはＳＫ１が存在する。ＳＫ１はＳＢ１の梁間１間分とほぼ同じ規模である。ＳＫ１の西に存在する小穴（N43pit２）は、ＳＢ１東端からそれの桁行１間分の距離にあり、さらに北から２間目の梁間のほぼ中央に相当する。これらの遺構の配置とその数値から、掘立柱建物と土坑が有機的な関係にあることはまず間違いない。

掘立柱建物に伴う土坑として想起されるのは、いわゆる南東隅土坑である。これは建物内部の南東隅に土坑を内包するものであり、当資料とは自ずから性格が異なる。ただし、県下での南東隅土坑資料が示す時期は平安時代末～鎌倉時代に集中し、当資料も時期的にはそれに併行する。類例の増加を待たざるを得ない現状では、建物に伴う土坑を設ける時期的な特徴の一環として把握が可能なこと、その付設方法には建物南東隅以外にも幾つかの方法が存在していたらしいこと、の２点を指摘しておく。

なお、ＳＫ１出土土器（22～23）とＳＢ１柱痕跡内出土土器（10～19）には型式差がある。これについては前者が建物存在時期を、後者が建物廃絶時期を示すものと考えておきたい。

客土層について　次にⅠ～Ⅲ区の土層観察によって認められた客土層を検討する。今回の調査区は水田と植林地の境目にあたる。客土層の色調は黄色～赤褐色系統で、質はかなり脆弱である。この色調の土は今回の遺構基盤層およびその下の地山とも言うべき土と同系統と考えられる。そして水田部に接するあたりに最も厚い堆積が認められる。このことから遺構基盤層および地山を掘削した土と考えるのが最も適当であろう。調査区周辺の地形は東から西へなだらかに傾斜するものであり、調査区付近の現水田面より１段高い部分を削平したとは考え難い。このようなことから、この客土層は現在の水田部分から運ばれたものと考えられよう。

さて、現水田部分から相当量の土が運ばれる理由としては、水路設置、水田域拡大、の２者が考えられる。このうち水路の設置のための排土とするにはその量はあまりにも多い。したがってここでは水田域拡大に伴う客土の可能性を考えたい。

この客土層の形成時期を示す土器にⅠ区出土の陶器鉢（62）、Ⅱ区のＳＤ１出土土器（56～59）および陶器擂鉢（55）がある。62は前述のようにおおよそ19世紀前半に比定される。55は群馬県渋川市・中村遺跡で調査された、天明３（1783）年の浅間山大噴火によって埋没した遺構群から出土した擂鉢と同型式と考えられるため、それとさほど時間的に隔たるものではなかろう。

以上のことから西暦1800年前後を中心とした時期に客土層の形成、すなわち水田域が拡大された可能性を考えたい。

（伊藤裕偉）

［註］

① 明和町教育委員会・三重県教育委員会編『斎王宮跡－広域市町村圏道路調査－』(1977)

② 明和町教育委員会中野敏夫氏のご教示による。皇学館大学考古学研究会編『土師器とその産－明和町を中心として－』(1986)

③ 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」(『三重考古学研究』１　1985)

④ 藤澤良祐「本業焼の研究（１）」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅳ　1987)

⑤ 横田克明・五十嵐信ほか『中村遺跡』(渋川市教育委員会　1986)

調査前風景（Ⅲ区）

調査風景（Ⅲ区）

北側全景（南から）

ＳＤ４および東壁土層断面（西から）

全景（南から）

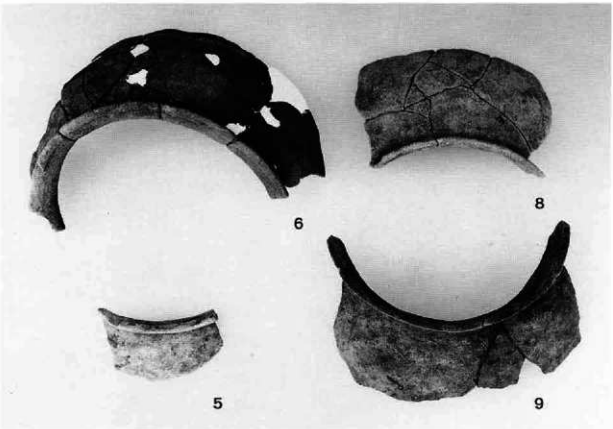
溝ＳＤ１　遺物出土状況および土層断面（西から）

全景（北から）

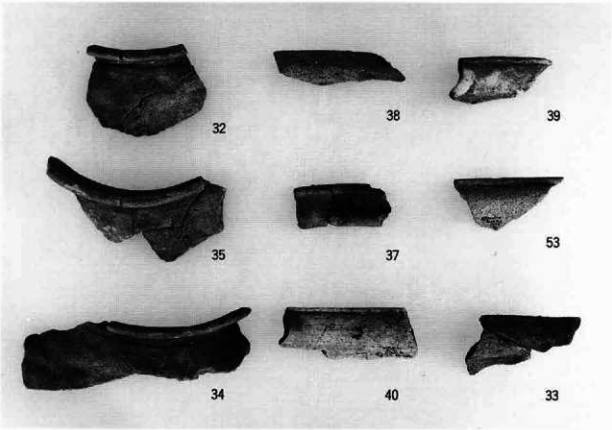
ＳＢ１付近（西から）

土器出土状況（東から）

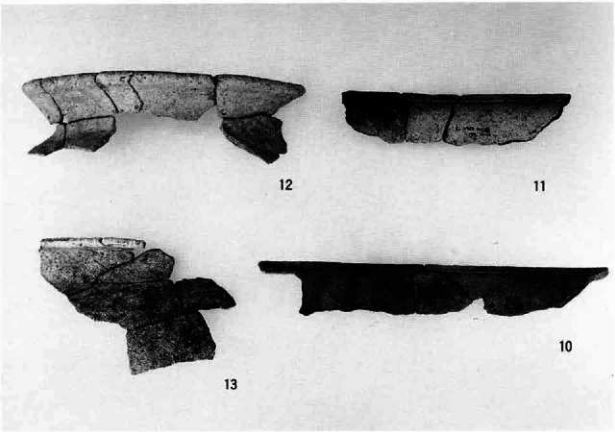
完掘状況（東から）



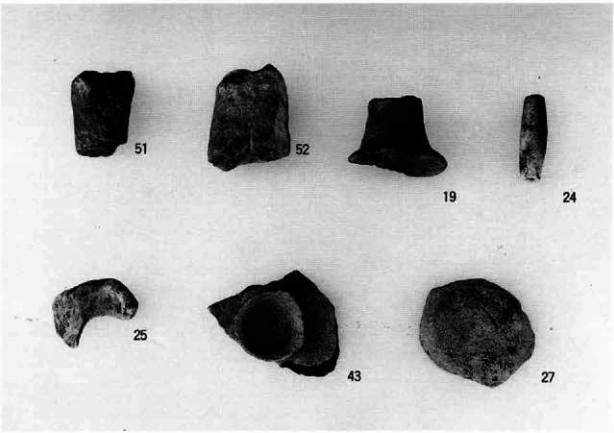
ＳＫ３出土土器（第43図）



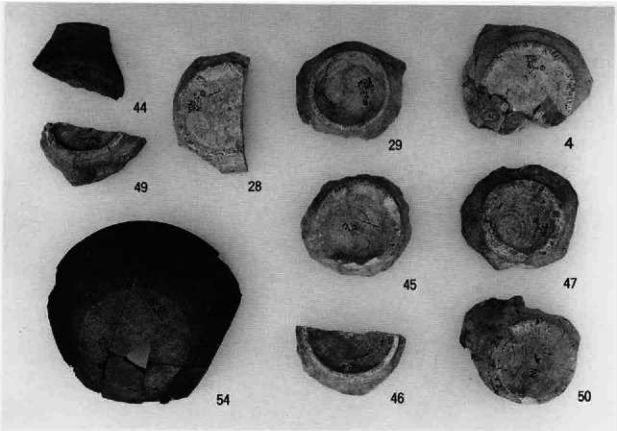
土器溜り出土土器（第44図）



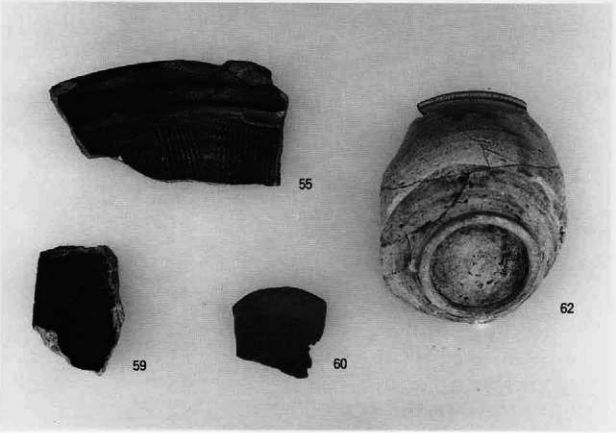
ＳＢ１出土土器（第43図）



土製支脚・土錘他土師器類（第44図）



須恵器・陶器類（第44図）



Ⅰ・Ⅱ区出土土器（第44図）

昭和63(1989)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告８８－２

昭和63年度農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告

－第２分冊－

1989年３月

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　光出版印刷株式会社